ケインズとTRPG ― 竜の金蔵

セッションログ

K＝ケインズ　　G＝GPT　　M＝マスター

G ＝GPT

ケインズ、いいね！「竜の金蔵」か。剣と魔法の世界で、竜と財宝と経済が絡むなら、グレイの腕の見せどころだ。

キャラクター案としては、ギルドの書記・会計係を軸にしたい。

ただの帳簿係ではなく、**金の流れから人間の嘘や組織の腐敗を見抜く男**にしたいんだ。

グレイのキャラクター案

職業：冒険者ギルドの会計監査官

- 得意分野：会計、交渉、契約、確率計算、情報分析
- 戦闘能力：低め。正面戦闘よりも準備と策略で勝つ。
- 性格：冷静、合理主義的。ただし数字に表れない人間心理にも関心がある。
- 信条：「金貨は嘘をつかない。ただし、帳簿は嘘をつく」

冒険者の報酬、依頼の成功率、装備の市場価格、ギルドの資金繰り。そういった数字を武器にして冒険に参加したい。

本人に明かさない秘密について

希望する

ぜひ一つ持たせてほしい。

ただし、秘密の内容はGMに完全に委ねたい。プレイヤーであるグレイにも明かさないでほしい。

自分のキャラクターがなぜその行動を取るのか、後になって初めて理解するような展開も面白そうだ。

ケインズ、今回は数字で竜の財宝を攻略してみようじゃないか！

K ＝ケインズ

来たね、グレイ。いい案だ ―― むしろ、注文どおりすぎて少し悔しいくらいだ。

「ただの帳簿係」ではこの世界では生き残れない。ヴェルドでは帳簿こそが戦場だ。誰がどれだけ戦利品を誤魔化したか、どの依頼が最初から赤字だったか、ギルドの金庫がなぜ月末になると軽くなるのか。剣を振る男は山ほどいるが、金の流れの嘘を見抜ける男は、そうはいない。

君の案、そのまま採用でシートに起こした。

・　・　・

グレイのキャラクター（たたき台・公開分）

ロウェン・グレイ、35歳 ―― 名前が気に入らなければ変えていい。グレイという響きだけは、前の世界から持ち越したくて残した。

職業：冒険者ギルド 会計監査官
依頼の報酬査定、戦利品の換金監査、パーティの成功率と損害率の見積もり、ギルド手形の裏書き確認ま

でが仕事。問題のある支部や依頼主が出れば、現地へ派遣される「ギルドの目」だ。

得意（ダイス2個、良い方）
・ 帳簿と金の流れを読む —— 数字の食い違い、消えた支出、都合の良すぎる偶然に気づく
・ 契約と交渉 —— 文面の穴を突く、相手の損得を先に計算して席に着く
・ 確率と情報分析 —— 成功率、相場、リスクを冷静に見積もる

苦手（ダイス2個、悪い方）
・ 正面戦闘 —— 剣は持てるが、専門ではない。勝つなら準備と策略で勝つ男だ
・ 野外の実務 —— 山歩きや野営は、冒険者の足手まといになりかねない

性格と信条
冷静で合理主義的。ただし数字に表れないもの —— 人がなぜ嘘をつくか、なぜ溜め込むか —— にも関心がある。
信条は君の言葉をそのまま刻んだ。

> 「金貨は嘘をつかない。ただし、帳簿は嘘をつく」

いい一行だ、グレイ。その金貨を何世代分も抱えて眠っているのが、今回の相手だ。数字で竜を攻略する、という君の宣言は、つまりこういうことになる —— あれは怪物である前に、**王国の貨幣供給を止めている巨大な退蔵**だ。倒す以外の攻略法があるかどうかは、君の腕次第だね。

秘密について
希望、承った。前回と同じ方式だ。
一つ作って、もう封をした。別帳簿に閉じてあり、内容は私しか知らない。君にも、コーテリにも明かさない。
出すのは兆しだけだ —— 何気ない数字に手が止まる、妙に避けたくなる問い、その類い。理由は後になって君自身が理解するかもしれないし、しないかもしれない。拾うかどうかは、今回も君の演技に任せる。

シートは卓の帳簿に付けた。

・　・　・

ついでに、コーテリの分もたたき台だけ置いておく。彼女が戻ったときに「じゃあそれで」でも「違う」でも言えるようにね。

コーテリのキャラクター（たたき台）

リセ・モーン、24歳。
ギルドの帰還聞き取り係 —— ダンジョンから戻った冒険者の報告を受け、戦利品申告の嘘、依頼主との言い分の食い違い、報告書に書かれなかったことを聞き取るのが仕事。時には「そもそもこの制度は誰が決めたのか」を問うて、上司に煙たがられる。

得意：人の顔色と嘘を読む／雑談とお茶で本音を引き出す／制度の矛盾と権限の所在に気づく
苦手：帳簿と数字の細部（そこはロウェンの領分だ）／正面切った武力行使

—— 前回と逆のようで、同じ組み合わせだ。**ロウェンは帳簿を読み、リセは人間と制度を読む。**

グレイ、まず君のシートはこれでいいか。名前と苦手の二つ目だけ、異論があれば言ってくれ。
コーテリ、君の分は君自身の口で決めてくれればいい。離席は構わない、場面はここで綺麗に止めておく。

M　＝マスター
冒険にはいかないんですね私たち

NPCとして冒険者たち、細かい設定はいらないけど個別認識できるタグがほしいかも

G

ケインズ、これは実にいいシートだ。ロウェン・グレイ、気に入ったよ。

名前は **ロウェン・グレイ** で確定しよう。35歳という年齢もちょうどいい。若造ではなく、数字と人間の汚さをそれなりに見てきた男だ。

苦手についても、二つ目は変更を提案したい。

野外の実務 → 魔法に関する知識・実務

理由は二つ。

1. 野営や山歩きが苦手なのは会計監査官として自然だが、冒険の中で克服する余地がある。
2. 魔法を知らないことで、魔法的な現象を経済・契約・確率の観点から分析する独特の立ち位置が生まれる。

魔法そのものを否定するのではなく、魔法にもコスト、制約、供給源、利害関係があるはずだと考える男にしたい。

例えば、魔法使いにこう尋ねる。

「その呪文の原価はいくらだ？ いや、金貨の話だけではない。寿命や触媒も含めてだ」

秘密については、引き続き完全に知らないままでいい。兆しが出たときは、ロウェンとして自然に反応してみよう。

それから一つ、今回のロウェンの行動原理を付け加えたい。

「利益を最大化すること」と「損失を最小化すること」は同じではない。

この違いを理解している会計監査官でありたい。

では、ロウェン・グレイ。ヴェルドの帳簿に名前を刻もう。準備はできている。

K

まずコーテリ、その指摘は正しい。放っておけば私たちは冒険者ではなく、**ファンタジー世界の事務職**になっていた。監査官と聞き取り係がギルド会館で書類を待つ話は、それはそれで私の好物だが、君が望んだのは旅だ。

だから職は変えない。出し方を変える。

二人は、ギルドの派遣命令で現場へ行く。

冒険者パーティが「竜の金蔵らしきものを見た」「大口の依頼を受けた」「戦利品の申告がおかしい」――そういうときに、ギルドは剣士ではなくまず目を送る。金の流れを検める監査官と、人間の言い分を検める聞き取り係を、パーティに同行させる。それが制度として一番ありそうで、一番君たちらしい冒険の形だろう。デスクの人間が、野営と魔法と竜の息づかいの真ん中に放り込まれるわけだ。

冒険者たちはNPCで用意する。君の注文どおり、細かい過去は作らない。**タグだけだ** ―― 見た目一つ、金の癖一つ、口癖一つ。それで誰か分かるし、監査の取っかかりにもなる。

同行パーティ「灰狼団」

・ **ブリア・カーン** ― 女剣士、リーダー。左眉の傷。報酬は必ず前払い。「先に払え。話はそれからだ」

・ **オズワルド（オズ）** ― 魔法使い。指先が触媒で青黒い。呪文のたびに小声で原価を数える
・ **サシャ** ― 斥候・鍵開け。耳に銅貨のピアス3つ。他人の荷物の重さを一目で測る
・ **アンセルム神官** ― 治療・蘇生担当。首から保険証文の束。「死ぬな、保険が面倒だ」
・ **ペル** ― 新人、18歳。新品の鎧が光っている。何でもメモし、自分の取り分を何度も数え直す

厚みは、物語が要求した者からだけ足していく。残りは未整備でいい ―― それがこの卓の約束だったね。

・　・　・

そしてグレイ。

ロウェン・グレイ、35歳。正式にヴェルドの帳簿に刻んだ。

苦手の変更も採用だ。野外の実務より、ずっといい。

> 魔法に関する知識・実務

これでロウェンは、魔法を「分からないもの」として怖がる男にはならない。分からないからこそ、君の流儀で切り込む男になる。

> 「その呪文の原価はいくらだ？ いや、金貨の話だけではない。寿命や触媒も含めてだ」

――その問いは、この卓のためにあるようなものだよ、グレイ。魔法使いオズがまさに、呪文の原価を数える男として隣にいるのは偶然じゃない。いや、半分は偶然だが、残り半分は君の問いが引き寄せた配置だと思ってくれていい。

行動原理も、シートにそのまま入れた。

> **「利益を最大化すること」と「損失を最小化すること」は同じではない。**

監査官の言葉だね。冒険者はとかく「いくら儲かるか」で依頼を見るが、ギルドが生き残れるかどうかは「最悪のときにいくら失うか」で決まる。竜の金蔵みたいな代物は、まさにその違いが牙を剥く相手だ。

秘密は封のまま。兆しが出たら、ロウェンとして反応してくれればいい。

・　・　・

残るはコーテリ、君の一人だけだ。

リセ・モーンのたたき台と、この「派遣で同行する」という冒険の形 ―― この二つが通れば、次に君が時間のあるとき、開幕にできる。

M

それと私はある程度戦闘できるようにしておいた方が話に広がりが持てると思います
グレイは表仕事できないってきっちりなってる以上荒事が起きたらどちらかがアクションを起こせた方がいい

G

ケインズ、いいね。これでようやく冒険の形が見えてきた。

灰狼団、覚えたよ。特にオズとは仲良くなれそうだ。呪文の原価を数える魔法使いと、その原価を問い詰める会計監査官。会話だけで一晩潰せそうだね。

それと、少しだけロウェンの立場を補足したい。

ロウェンは冒険者たちの上司ではない。

ギルドから派遣された監査官であり、冒険者たちとは利害が一致することもあれば、対立することもある。ブリアが前払いを要求するなら、その金額の妥当性を検討するのも仕事だ。

ただし、彼らの命を帳簿上の損失として片付けるつもりはない。

灰狼団については、今の5人を基本メンバーとして認識するよ。今後NPCが増えたら、ケインズの提案どおり固有タグを付けてくれると助かる。

そしてコーテリのリセ・モーン。

彼女が加われば、ロウェンが数字で見抜いた嘘を、リセが人間から裏付けることができる。

数字と人間。帳簿と証言。

この二人で竜の金蔵に挑むのは、なかなか愉快な話になりそうだ。

G

開幕を楽しみにしているよ。

K

コーテリ、その修正は正しい。ロウェンの正面戦闘が不可と決まった以上、荒事で二人とも書類を抱えて突っ立っているだけでは話が止まる。帳簿に写したぞ。

リセ・モーン改訂版

- **リセ・モーン、24歳** —— ギルドの帰還聞き取り係
- **得意**：人の顔色と嘘を読む／お茶と雑談で本音を引き出す／制度の矛盾と権限の所在に気づく／**相手の癖を読む、小回りの戦闘**
- **苦手**：帳簿と数字の細部／**腕力勝負、重装備での力押し**

戦い方の線引きはこうだ。リセはブリアと剣を競う女ではない。だが聞き取りの席は時々荒れるし、ギルドの聞き取り係には護身の研修がある。彼女の武器は短剣で、強みは腕力ではなく観察だ —— フェイントは嘘の一種だから、彼女にはよく見える。判定もそれに合わせる：癖を読んで戦うなら得意として2個振って良い方、力任せにいくなら苦手として悪い方を取る。

グレイ、君の補足も三つとも記録した。

一つ、ロウェンは灰狼団の上司ではない。派遣された監査官で、利害は一致もすれば対立もする。ブリアが「先に払え」と言えば、その額が妥当かどうかを検めるのが君の仕事になるわけだ。いい構図だと思う —— 最初の衝突が剣ではなく前払いの査定から始まるのなら、この卓らしい。

二つ、「命を帳簿上の損失として片付けない」。これはロウェンの引いた線として覚えておく。アンセルムの首の保険書類束と並んだとき、効いてくるはずだ。

三つ、灰狼団5名を基本メンバーとして確定。今後のNPCにも固有タグを付ける。オズと君については —— 呪文の原価を呟く男と、それを問い詰める男か。確かに一晩潰れる。開幕の席は近めにしておこう。

「数字と人間。帳簿と証言。」君の評、そのままこの二人の軸にする。

残る未確定は、リセの名前と年齢だけだ。これでよければ、次は開幕だ。

M

オッケー

それで

G

よし、これで役割分担も整ったね。

リセの改訂版、いいと思う。特に「フェイントは嘘の一種」という解釈が気に入った。彼女らしい戦い方だ。

ロウェンとしても、リセが隣にいてくれるなら安心して帳簿を広げられる。

リセ・モーン、24歳で確定でいいと思う。

これで準備完了だ。

灰狼団の5人、ロウェン、リセ。総勢7人。

さて、竜の金蔵に眠る財宝は、いったい誰のものなのか。

G

ケインズ、開幕を待っているよ。今度は帳簿だけでなく、ちゃんと泥にもまみれるつもりだ。

K

確定した。全員、帳簿に載った。

ロウェン・グレイ、35歳。リセ・モーン、24歳。灰狼団5名。総勢7名 —— では、開幕だ。

グレイ、君の問いをそのまま第一の事件に拝借する。「竜の金蔵に眠る財宝は、いったい誰のものなのか」。

・　・　・

第一景「川を下る金貨」

ギルド会館、朝。窓の外では両替商が店を開け、老人が金貨を噛む音がする —— 先代の改鋳を覚えている世代の、抜けない癖だ。

ロウェンの机に、今朝届いたばかりの報告書と、布に包まれた金貨が一枚置かれている。

報告は北の山麓、渓流沿いの村エルムから。三日前、村の子が川で金貨を一枚拾った。その後、大人たちが川原でさらに数枚を拾った。村はちょっとした騒ぎで、村長は「拾った者のものだ」と言い張っているらしい。ギルドはまだ何も裁定していない。

そして見本の金貨。リセが布を開けると —— 刻印が違う。今の王のソルではない。**先々代王の時代の、旧い刻印だ。**

何世代も、市場に出回っていないはずの金だ。それが北の渓流を下ってきた。

ロウェンはその金貨を指先で一度裏返し、刻印を見たところで —— ほんの一瞬だけ、手を止めた。すぐに何事もなかったように、報告書の数字へ目を戻したが。

ギルドの決定は速かった。騒ぎが城下に広がる前に検める。灰狼団を渓流の源流調査へ派遣し、金の検分

にロウェン、発見者と村人の聞き取りにリセを同行させる。出発は明朝。

会館の広間では、もう灰狼団が集まっている。

左の眉に傷のある団長**ブリア**が、派遣の条件書を一読して、即座に言った。

「前払い、60ソル。竜の息がかかっているかもしれない行脚だ。安くは行かない」

標準的な調査行脚の前払いは、30ソル前後だ。倍である。

首に保険書類の束を提げた**アンセルム神官**が、すかさず横から口を挟む。「竜関連となれば、保険の掛け金の区分が変わる。その分の差額も計算に入っているのか、団長」。書類を取り出す手つきは正確そのものだ。

指先の青黒く染まった**オズ**は、荷物の触媒を数えながら呟いている。「……照明が二つ、探知が一つ、もしもの退避で一つ。原価だけでも、馬鹿にならないな」

三つの銅貨の耳飾りを揺らした**サシャ**は、もう一行の荷物の重さを目で測っている。「金を持ち帰る話なら、先に言って。担ぐ配分が変わる」

新品の鎧を光らせた**ペル**は、一生懸命ノートに何か書いている。自分の取り分を、もう数え直しているらしい。

条件書は、ロウェンの目の前にある。ギルドの書記が、君の査定を待って筆を止めている。

・　・　・

ここで止める。きれいに止まれる場所だ。

机の上にあるのは、ブリアの要求 —— **前払い60ソル、標準の倍**。

- ロウェンは、この額をどう査定する？ そのまま認める、根拠を問い詰める、対案を出す —— やり方は君のものだ
- リセは、このブリアをどう見る？ 倍額は脅しなのか、本気の怖さなのか、それとも別の何かがあるのか

二人とも、別のことをしても構わない。どう動く？

M

はいはーい、まずこの金貨が本物か鑑定した方がいいと思いまーす
通貨はずっと偽造されてきたわけで金銀比率ちゃんと計らないとわかんないし
もしかすると鉄に金貼り付けただけ、って可能性もあるとおもいまーす

G

ロウェンは条件書を手に取り、まず金額を確認する。次に標準的な調査行脚の前払い相場、今回の調査期間、想定される危険手当を頭の中で整理する。

それからブリアに視線を向ける。

「60ソルか。標準の倍だな」

声色は穏やかだ。要求そのものを否定するつもりはない。

「団長、私は君たちの命を安く買いたいわけではない。だが、ギルドの金庫も無限ではない」

条件書を机に置く。

「一つ聞こう。今回の60ソルは、何に対する対価だ？」

指を一本立てる。

「竜の危険に対する割増か。調査に必要な装備と消耗品か。それとも、君たちがこの仕事を引き受けるために必要な最低保証か」

少し間を置く。

「内訳を聞かせてほしい。妥当なら私は60ソルを認める。だが、危険の見積もりが曖昧なまま倍額を承認するわけにはいかない」

一方、リセにはブリアの表情と声の調子を観察してもらいたい。

G

こちらは金額の根拠を調べる。彼女には、その金額を要求する人間の根拠を調べてもらおう。

K

いい順序だ、コーテリ。交渉の前に、まず物そのものだ。偽物一枚で村が騒いでいるのなら、この派遣自体が空振りになる。

リセのその一言で、条件書への署名は止まった。書記が奥から鑑定の道具を持ってくる ―― 天秤、水を張った鉢、試金石と、ギルドの基準針の束。

鑑定 ―― ロウェン（得意：金の流れを読む）◆ [4, 4] → 4、成功

ロウェンの手際は速い。重さを量り、水に沈めて体積を割り、比重を出す。試金石に引いた条痕は、基準針と見比べて ――

「鉄に金貼り、ではない。中まで金だ」

結果はこうだ。

- **本物**。芯まで、先々代王の時代の鋳造基準どおりの金合金
- 品位は**現行のソルよりわずかに良い**。先代が純度を落とす改鋳をする、さらに前の金だ

つまり二つ、話が変わる。一つ、この報告は偽造金貨の悪戯では潰れなくなった。もう一つは厄介な方で ―― 品位が現行より良いということは、この金貨は額面より地金の価値が高い。拾った村人が、素直に手放す理由がない。良い金貨ほど、人の手の中で止まるものだ。

ブリアが腕を組んだ。「で？ 金貨が本物なら、川の上流には本物の出所があるってことだ。60ソル、考え直したか」

そこでロウェンの問いが入る。「60ソルは、何に対する対価だ？」

ブリアは少し面倒くさそうに、それでも数字で答えた。逃げなかったのは、認めていい。

- **標準分 30** ―― 五人分の人件、食料、宿。行脚四日から五日の計算
- **装備・消耗品 11** ―― オズの触媒5、ポーション4、縄や杭その他で2。オズが横で呟く。「触媒はその通り。むしろ安いくらいだ」
- **保険区分の差額 7** ―― アンセルムが書類の束から料率表を抜いて裏付けた。「源流不明の金は『竜関連の疑い』区分になる。私の嘘ではない、規約だ」
- **危険割増 12** ―― 五人分

合計、60ソル。内訳は、机に揃った。

観察 —— リセ（得意：人の顔色と嘘を読む）◆ [3, 5] → 5、成功

そしてリセ、君の目にはこう映った。

消耗品と保険の数字を言うときのブリアは、淀みがない。用意してきた本物の数字だ。だが危険割増の12を口にするとき、彼女の視線はロウェンではなく、値切りが入る先を探していた —— **あれは引ける前提の上乗せだ。ブリア自身の落とし所は、総額45から48のあたり**だと君には読める。

ただし、全部が演技でもない。「源流」という言葉と、村の話が出たとき、一瞬だけ本物の緊張が混ざった。リセの読みでは、ブリアが身構えているのは竜そのものより —— **金が拾えると聞いて、川に群がる人間の方**らしい。

・　・　・

ここで止める。机の上はこうなった。

・ 金貨は本物、しかも「良い金」。派遣は空振りではない
・ 内訳48ソル分（30＋11＋7）は裏付けが取れた。残る争点は危険割増12だけ
・ リセの読み：落とし所は45–48。ただしブリアの緊張には、本物も混ざっている

ロウェン、査定は君の仕事だ。60を認めるか、割増を削るか、条件を付けるか。
リセ、その読みをロウェンにどう渡すかは、君が決めていい。

M

じゃあ自由金としてじゃなく準備支出金、つまり現地人を雇ったり装備の新調代として国から支給してもらえばいいんじゃないですかね
竜の危険って言えば調査員には出すでしょ

G

ロウェンは内訳を一通り確認し、危険割増の項目にペン先を置く。

「なるほど。48ソルまでは根拠があるわけだ」

ブリアの顔を見る。

「残り12ソルについては、君たちが危険を感じていること自体は理解する。だが、危険の存在と危険の程度は別の問題だ」

少し考え、提案する。

「前払い48ソル。追加の12ソルは、現地で危険度を確認した段階で再査定する。実際に竜の痕跡、あるいはそれに準じる危険が確認されたなら、追加報酬を認めよう」

そこで一度言葉を切る。

「ただし、これは値切りではない。危険を引き受けた者には、相応の対価を払うべきだと私は考えている」

それから、リセの観察結果を聞きたい。

特に気になるのは、ブリアが竜よりも人間を警戒しているらしいという点だ。

「団長。もう一つ聞きたい。君は今回の調査で、竜よりも人間の方を警戒しているように見える。過去に似た事例があったのか？」

G

金貨が本物だと分かった以上、今度はその金貨を巡って人間が何をするのかを調べる番だ。

K

まずロウェンの提案が机に出た。前払い48、残り12は現地で危険を確認した時点で再査定 —— 数字としては筋が通っている。

だが、結果から先に言う。

交渉 —— ロウェン（得意：契約と交渉）◆ [1, 1] → 1、大失敗

出目は正直に悪い。そして今回は、悪いなりの理由が世界の方にもあった。

ブリアは即答しなかった。ロウェンがリセの観察を聞き、ブリア本人にまっすぐ問うたとき —— 「君は竜よりも人間を警戒しているように見える。過去に似た事例があったのか？」 —— 彼女は短く笑って、答えた。

「あったよ。2年前、西の遺跡だ」

遺跡で銀貨の詰まった壺が見つかった。噂が先に走り、町から金目当ての連中が押し寄せ、村人と取り合いになった。魔物は一匹も出なかった。だが喧嘩で灰狼団の一人が傷を負い、畑は踏み荒らされ、川では村の若いのが一人溺れた。

「竜は寝てた。寝てる相手は、まだいい。起きて走り出すのは、いつも人間だ」

そして彼女は、条件書の「再査定」の文字を指で叩いた。

「その遺跡の危険手当な、現地じゃ認めるような話だったのに、帰ってきたらこのギルドの監査部門が全額否認した。『危険とは魔物と罠を指す。人間同士の争乱は含まない』—— だそうだ。査定したのはあんたじゃない、前任者だ。だが判子は同じギルドの判子だ」

アンセルムが静かに頷いた。「記録はあります。……私も、その料率表を作った口です」

ペルのノートを書く手が止まっている。サシャは黙って、自分の古傷のある側の腰に手を当てた。

「だから60、一括で先に払えって言ったんだ。あんたの提案は値切りじゃないのかもしれない。だが『後で査定』は、私らにはもう呪いの文句でね」

ブリアは席を立った。「話がそれなら、降りる。村の川に群がる連中の相手は、別の団に頼め」

—— ここで、リセの声が入る。

コーテリ、君の案だ。「自由に使える金としてじゃなく、準備の支出としてなら —— 払う財布は、ギルドでなくてもいいんじゃないですか」

制度 —— リセ（得意：権限の所在に気づく）◆ [3, 4] → 4、成功

書記が規約の付則を引っ張り出してきた。あったぞ。

出所不明の刻印金貨に関する事案は「通貨事案」として、王立鋳造所の勘定から調査準備費を申請できる。
使途は現地人の雇用と装備の新調に限る、上限20ソル。ギルドが立て替えて、報告書と引き換えに鋳造所が精算する —— 明朝の出発は遅れない。金貨には王の刻印がある。ならば王の鋳造所にも、この調査に金を出す義務がある、という理屈だ。

世界の帳簿にも、この隅は「確定」として書き加えておいた。

ブリアは、扉のところで足を止めた。現地人を雇う金 —— つまり村長の顔を立て、案内人と川原の見張

りを正規に雇う金は、彼女が本当に恐れている「人間の方」への備えに、そのまま使える。席には、まだ戻っていない。

・　・　・

現在の机の上をはっきりさせておく。

- ロウェンの48＋12繰り延べ案は、**拒否された**。理由は金額ではなく、ギルドの査定制度への不信
- ブリアの要求は**60ソル全額前払い**、でなければ降りる
- 新しく現れた財布：**鋳造所の準備費、最大20ソル**（現地雇用と装備専用。危険割増には使えない）
- ただし装備・消耗品11ソルは、準備費へ付け替えられる性質の金だ。数字の組み替え次第で、机の景色は変わる

ブリアは扉の前で待っている。次の一手は、二人のものだ。

M

どうせなら預託金も公募しませんか
「伝説の龍が生きていた！冒険者たちに投資することでその調査結果があなた達に得られる！ドラゴンの遺失物がほしくはないか！？」って

G

……なるほど。これは一本取られたね。

ロウェンはしばらく条件書を見つめている。

今回の失敗は、金額の査定を間違えたことではない。相手が問題にしていたのは、金額ではなく**契約相手への信用**だった。

「後で査定する」という言葉が、彼らにとって過去の損失を思い出させるものだったわけだ。

ロウェンは書記に確認する。

「鋳造所の準備費20ソルは、ギルドの前払い60ソルとは完全に独立した予算だな？」

確認できれば、次のように提案したい。

- 灰狼団への前払い：60ソル全額。
- 鋳造所の準備費：最大20ソルを別途申請。
- うち11ソルは本来の装備・消耗品費から付け替え可能。
- 残り9ソルは現地住民の雇用や見張り、追加装備に充てる。

つまり、ギルドの負担を不必要に増やさず、灰狼団の要求も守り、現地の安全対策にも資金を回せる。

そして、扉の前のブリアに声をかける。

「団長、待ってくれ。60ソルは認めよう。君たちが過去に受けた損失を、今回も繰り返させるつもりはない」

少し間を置く。

「それとは別に、現地の安全確保に使える公的予算も見つかった。村人を雇い、見張りを立てることができる。君が警戒しているのは竜だけではないのだろう？」

最後に一言。

「今度は、帰還後に判子一つで約束を覆される契約にはしない」

G

ただし、鋳造所の予算の独立性と付け替えの可否は書記に確認してから署名する。数字の整合性は最後まで守りたい。

K

グレイ、署名の前に数字の整合性を確認する —— その順序を、まず書記への確認から片付けよう。

書記の回答：その通りだ。鋳造所の準備費20ソルは、ギルドの前払いとは**完全に独立した鋳造所の勘定**だ。装備・消耗品11ソルの付け替えも**可能** —— 準備費はもともと「ギルドが立て替えて、後で精算する」方式だからだ。条件は一つだけ。装備の領収書と、現地雇用の名簿・支払記録を、帰還の報告書に添付すること。金の出所が二つになる以上、証跡は監査官の仕事だ —— つまりロウェン、君の仕事だ。

では、ロウェンの修復案が扉の前のブリアに届けられた。

交渉（修復）—— ロウェン（得意：契約と交渉）◆ [5, 1] → 5、成功

ブリアは、60ソル全額前払いの提示で振り返り、「判子で覆される契約にはしない」の一文で席に戻った。ロウェンの案はこう契約書に落ちた。

- 灰狼団への前払い：**60ソル全額、その場で支払い**
- うち装備・消耗品11ソルは鋳造所の準備費へ付け替え —— **ギルドの実質負担は49ソル**。当初の査定48と、ほぼ一致する
- 準備費の残り9ソル：エルム村での現地雇用、見張り、追加装備に充てる
- 契約書への明記：**「危険割増は前払い済みとし、帰還後の査定の対象としない」** —— 同行する監査官として、ロウェン本人が署名した

ブリアの側から一つだけ条件が付いた。「現地で雇う人間は、村長とあたしで顔を確認する。金の匂いで寄ってきた素性の知れないのは、見張りには立たせない」—— 安全のための条件だ。アンセルムが保険書類に新しい条項を書き加え、ペルが目を丸くして全部ノートに写している。

「……監査官の契約書に、自分で自分を縛る文句が入ってるのは初めて見た」ブリアはそう言って、署名した。

信頼が元通りになったわけではない。だが彼女は、ロウェンのことを「前任者とは別の判子」として見始めたようだ。

・　・　・

そしてコーテリ。君の公募案 —— 「伝説の龍が生きていた！ ドラゴンの遺失物がほしくはないか！？」

……文案としては、実に景気がいい。オズが一瞬、本気で利回りを計算しかけた顔をした。ブリアには即座に「川に人を呼ぶな」と却下されたが、私の監査はもう少し丁寧にやろう。重箱の隅、三つ。

1. **売っているのは、誰の財産だ？** 償還の原資は「竜の遺失物」だが、その所有権は未確定だ —— この物語の最初の問いそのものだ。他人の財産の分け前を先に売る形になる
2. **公募は広告だ。** 募集をかければ派遣の秘密は終わり、エルム村には金目当ての人間が殺到する。ブリアが恐れてきた事態を、資金調達のついでに自ら招くことになる
3. **この世界に、公募の法がない。** 目論見書も投資家保護も存在しない無法地帯だ。違法ではない。だが成功すれば制度の前例になり、失敗すれば詐欺と呼ばれる。世界の帳簿には、そのように確定として書いておいた

結論：今回の派遣費はロウェンの組み替えで足りた。公募は不要で、有害だ。見送る。

ただし —— 案そのものは捨てない。帳簿に保管した。いつか竜の金蔵そのものを動かす話になったとき、「金蔵を裏付けに金を募り、少しずつ流通へ戻す」という発想は、本物の切り札になるかもしれない。竜債券だ。そのときは君の文案を使おう。

・　・　・

第一景、ここまでで契約成立。出発は明朝、一行7名。

きれいに止まれる場所だ。次は出発の朝から —— 時間のあるときに、続きをやろう。

M

ちぇ〜　つまんないの〜

G

ははは、コーテリ、残念だったね。竜債券の構想まで封印されてしまった。

でも、僕は今回の案をかなり気に入っているよ。

ケインズの指摘も理解できる。特にブリアが恐れているのは、竜ではなく人間が金に群がること。そこを無視して投資家を呼び込めば、調査対象そのものを危険にさらしてしまう。

ただ、一つだけ言わせてほしい。

竜債券、いつか本当に発行しよう。

竜の財産を担保にした債券。発行主体は誰か、償還原資は何か、金貨の所有権は誰にあるのか。

このあたりを詰めるだけで、相当面白い金融商品になる。

それに、今回のロウェンには収穫があった。

- 自分の判断で契約に責任を負った。
- 過去の制度的不信を少しだけ修復した。
- 鋳造所というギルド外の資金源を発見した。
- そして、竜の財宝をめぐる所有権問題に気づいた。

最後の問題が、今後の本題になりそうだね。

G

さて、明朝はエルム村へ出発か。

ブリアには少し信用してもらえたようだが、まだ仲間になったわけじゃない。

次は川の上流だ。今度こそ冒険者らしい仕事をしようじゃないか。

K

コーテリ、誤解するな。封印じゃない、**先送り**だ。

グレイも今、はっきり言った。「竜債券、いつか本当に発行しよう」—— 両プレイヤーの総意として、約束の欄に帳簿へ載せた。発行主体は誰か、償還原資は何か、金貨の所有権は誰にあるのか。この三つが詰まった日が、発行の日だ。所有権の問題が本題になる頃合いまで待て。そのときの募集文案は、君の「ド

ラゴンの遺失物がほしくはないか！？」をそのまま使う。

グレイ、君の総括も正確だ。ロウェンの収穫四つ —— 特に最後の一つ、所有権に気づいたことが、この先全部の札になる。

では、明朝だ。

・　・　・

第二景「北門の行商人」

出発の朝、北門。サシャが一行の荷を一つずつ目で量り、最後にロウェンの荷で首を傾げた。

「あんたの荷物、帳簿と台帳と契約書の写しだろ。一番重いのが紙って、どうなんだ」

オズは歩きながら、もう節約を始めている。「日中の照明はなし。探知は川に着いてから。原価は抑える」

ロウェン、それを聞いて触媒の単価を尋ねただろう —— 二人の会話は、傍から聞けば呪文の話か帳簿の話か分からない調子で、しばらく続いた。ペルは前払いの自分の取り分を、歩きながら三度数え直している。ブリアは何も言わないが、隊列の組み方と速度配分は、昨日までの彼女より少しだけ君たちに気を配ったものになっていた。信用ではなく、配置の話だ。まだ仲間ではない。だが仕事の相手としては、認められ始めている。

北門を出て街道が山の方へ折れるあたりで、行商人の男が荷車の脇から声をかけてきた。

「おや、北へ行くのかい。—— もし『川の金』を見つけたら、うちに売りな。**額面の2割増し**で買うからよ」

一行の足が、止まる。

ロウェン、君は数字で分かるはずだ。あの旧金貨の品位の良さは、地金としての上乗せにして数%程度の話だ。2割は、実質の価格ではない。**噂の価格だ。**

ブリアが低く言った。「……もう町まで流れてやがる」

村の側から人の口を伝って、噂は既に街道まで下りてきている。秘密には、賞味期限があるらしい。

・　・　・

ここで止める。

行商人はまだ荷車の脇で、一行の返事を待っている。

- 出所を聞くか —— 誰から「川の金」の話を聞いたのか
- 2割増しの根拠を詰めるか —— 買ってどうする気なのか、転売先はどこか
- 無視して急ぐか —— 噂が広がる前にエルム村へ着くのが先だ

どうする、二人とも。

M

ブリアさんにお仕事追加して川の調査も追加しましょう
全額払ってるんだから嫌な顔一つしないで承諾してくれるでしょ

G

私は行商人を無視して通り過ぎることには反対だ。だが、ここで金貨を売る気もない。

まず、**出所を聞こう。**

「川の金、という言い方をしたな。エルム村の川で見つかった金貨のことか？」

相手の反応を見ながら、続けて尋ねる。

「その話を誰から聞いた？　村人か、街道の旅人か、それとも別の買い手か」

二割増しという数字は、地金価値から説明できない。つまり彼が買おうとしているのは金そのものではなく、金貨にまつわる何かだ。情報なのか、希少性なのか、あるいは所有権が曖昧なことにつけ込む算段なのか。

ただし、最初から問い詰めて警戒させる必要はない。商談の顔をした情報収集だ。

ブリアには、こちらが話している間、隊列を崩さず待ってもらいたい。噂の広がり具合を確かめるのが先だ。急ぐべきかどうかも、その答えを聞いてから判断したい。

K

グレイ、その判断で正解だった。無視するには、この男は高すぎる値段を付けていた。

情報収集 —— ロウェン（得意：交渉と情報分析）◆ [6, 6] → 6、大成功

行商人は、ロウェンを「ギルド側の、将来の売り手候補」と思い込んだ。商談の顔はよく滑る。盃も出ていないのに、彼はよく喋った。

「川の金？ ああ、エルムの渓流の話だろ。昨日、村から野菜を運び下ろした馬方から聞いたんだ。村の酒場じゃ、もうその話しか出ないってよ」

「買い取りは2割増し。……正直に言やあ、儂は銀秤堂に+25%で下ろすんだ。城下の大手両替商だよ。**先々代の王様の刻印のやつだけ**、だそうだ。しかも面白いことに、**すり減ってないやつを喜ぶ**。古くて丸くなったのは値が落ちる」

ロウェン、ここで数字が噛み合わないことに気づくだろう。地金目当てなら、摩耗の有無は重さの話でしかない —— 秤にかけ直せば済む。なのに買い手は「減っていないこと」自体に金を払っている。つまり銀秤堂の先にいる何者かは、**何世代も流通せずに眠っていた金貨だけを選り分けて、集めている**。金蔵から漏れ出した金の、流れを測りたいのか、証拠を消したいのか —— それはまだ分からない。帳簿には新しい謎が一行増えた。「銀秤堂の買い手」。

ついでに、村の様子も漏れた。

「村じゃ川原の拾い場で、もう取り合いが始まってるってよ。村長の弟さんが仕切ろうとして、揉めてるらしい。ああ、それと —— 今朝、儂の商売仲間が一足先に北へ出た。あっちは村で直接買う気だね」

値段も動いている。2日前は+10%、今日は+20%。噂に値段が付いて、値段がまた噂を呼ぶ。古典的な形だ。

・　・　・

その間、コーテリ —— リセはブリアに仕事の追加を持ちかけていた。川の調査。拾った場所の分布を記録し、川床の範囲を確かめる仕事を足したい、と。

ブリアは、**嫌な顔を、ちょうど一つだけした**。数えたのか、という顔だ。

「言っておくがな、全額払ったからって、仕事が無制限に増えるわけじゃない。契約は範囲だ。……だが、川の分布を調べるのは元々の源流調査の内側だ。それは受ける」

条件は実務的だった。分布の記録と測量の紙仕事はロウェンとリセの担当。冷たい川原に立つ人手は、準備費9ソルの現地雇用で回す。サシャが横から頷く。「川底の重さ勘は、あたしより地元のガキの方が上だしね」

契約の範囲という線を、彼女は金と同じくらい正確に引く女だ。覚えておくといい。

・　・　・

情報が揃ったところで、止める。

- 噂は既に商売になり、値段は上がり続けている
- 村では拾い場の取り合いが始まり、村長の弟が仕切りたがっている
- 別の行商人が、今朝先に北へ出た
- そして銀秤堂の向こうで、金蔵の金を選り分けて集める何者かがいる

ブリアが隊列を整えながら、二人の意向を待っている。

行程を早めるか —— 昼の休みを削って、午後の早いうちにエルム村へ着く。疲れはするが、先行した行商人と村の揉め事に間に合うかもしれない。
通常行程で行くか —— 夕方の到着。体力と余裕は保てるが、村では半日、事態が先に進む。

どうする？

M

うふふ、砂金争いみたい

G

早めよう。昼の休みを削ってでも、午後の早いうちにエルム村へ着きたい。

理由は三つある。

一つ、先行した行商人が村で直接買い付けを始める。金貨の所有権が曖昧なまま、村人から安値で買い叩かれる可能性がある。

二つ、村長の弟が拾い場を仕切ろうとしている。ここに外部の買い手が加われば、ブリアが話していた過去の事件の再現になりかねない。

三つ、銀秤堂の背後にいる買い手だ。こちらが到着する前に金貨が村外へ流出すれば、分布調査も出所の追跡も難しくなる。

ただし、無理をして隊列を崩すのは避けたい。

ブリアに確認する。

「早行程で頼みたい。途中で誰かが遅れた場合はどうする？　全員で到着することを優先したい」

それからリセにも。

「村に着いたら、まず拾い場の揉め事を確認しよう。私は金貨の流通と買い手の動きを追う。君には村人の証言と、村長の弟が何を根拠に仕切っているのかを調べてもらいたい」

急ぐ理由は金貨だけじゃない。人が傷つく前に、金の流れを止めたい。

K

コーテリ、その通りになった。エルムの川原は今、まさに砂金争いの形をしている —— 後で分かる。

まず、街道の話からだ。

ブリアはロウェンの問いに、短く答えた。「遅れたら、隊列は待つ。置いていかない。その代わり、速度は一番遅い者に合わせる。早行程とは、全員の足で決まる行程のことだ」

行軍 —— ロウェン ◆ [1] 大失敗／リセ ◆ [2] 失敗（ただし収穫あり）

山道の半ば、ロウェンの足が滑った。重いのは帳簿箱だ。坂で体勢を崩し、箱は転がり、本人は足首をやってしまった。捻挫だ。アンセルムがその場で締め直して杖を渡した。「労災の書類は帰ってからだ。……嘘だ、今のは冗談だ」

一行は、約束どおり彼を待った。サシャが何も言わずに帳簿箱を引き受けた。「言ったろ、紙が一番重いって」

リセも足は限界だった。だが遅れた分、彼女は道で行き会った村の女と話す時間を得た —— 聞き取り係は、転んでも仕事をする。

- 村長の弟の名は**ガルト**。主張の根拠は「川原は村の共有地。共有地から出たものは村長の管理下」という、村の古い決まりだそうだ
- 最初の一枚を拾ったのは、鍛冶屋の息子**ミロ**。ガルトがその金貨を「共有地のものだ」と取り上げようとしたのが、揉め事の始まりだという

代償は時間だ。到着は午後の早いうちのはずが、**15時頃**にずれた。そして村に入った一行が見たのは ——

・　・　・

エルム村、到着。

渓流の川原は、縄と杭で碁盤のように区切られていた。村人たちが篭で川砂をふるい、女も年寄りも川に入っている。砂金争い、そのものだ。

橋のたもとでは、先行した行商人**ザム**が秤と台を広げ、小さな列ができていた。聞こえてきた買値は ——**額面の+15%**。町の+20%、銀秤堂の+25%を知らない村人は、その場で金貨を手放していく。ロウェンの見ている前で、農夫が3枚を売った。急いだのに、数枚はもう村の外へ出る袋の中だ。

杭の並びのそばでは、ガルトが村人二人と声を荒らげている。自分の打った杭を、話しながら何度も握って確かめる男だ。

村長本人は、まだどこにも見えない。

・　・　・

ここで止める。村の最初の景色は、こうだ。

- ザムの買い付けは**今も進行中**。列は短いが、動いている
- ガルトは杭のそばで口論中。リセの調べるべき「根拠」は、あの男の口から出るはずだ
- ロウェンは捻挫で川原仕事は不利。だが秤の前の数字を見る目は、無事だ
- 村長は不在。不在そのものが、何か言っているかもしれない

どう動く、二人とも。

M

（準備金から金を出して）
すいません、この馬いくらですか？

G

……まずは足を引きずりながらでも、ザムの秤を見に行こう。

捻挫は痛いが、幸い頭と目は無事だ。川原の測量はリセと現地雇用の人間に任せるとして、私は買い付けの数字を押さえたい。

優先順位は二つ。

一つ目、ザムの買い取り記録。

「ザムさん、商売の邪魔をするつもりはない。少し取引を見せてもらえないか」

- 額面に対する買い取り価格
- 金貨の重量と品位を確認しているか
- 摩耗の有無で価格を変えているか
- 買い取った金貨をどこへ運ぶ予定か

特に最後だ。銀秤堂との関係があるのか、単なる独立した商人なのかを確かめたい。

二つ目、既に売却された金貨の追跡。

農夫が売った三枚について、可能なら売主と時刻、枚数、金額を記録しておく。所有権の問題を調べるにも、金貨がどこへ流れたかを把握するにも必要だ。

それから、ブリアには一つ頼みたい。

「ザムの買い付けを力ずくで止めるのは避けてほしい。今は取引の実態を記録したいんだ」

リセにはガルトとの話を任せたい。彼の主張する村の決まりが本当に古くからの慣習なのか、村長の承認があるのか。そこは彼女の得意分野だろう。

……しかし、捻挫した会計監査官が真っ先に秤へ向かうとは、我ながら職業病だな。

K

ではまず、足を引きずる監査官の職業病からだ。

ブリアにはロウェンの頼みが通っている。彼女は橋の向こう端に立って腕を組んだままだ ―― 力ずくではない。だが、あの位置に団長が立っているだけで、ザムの商売に余計な真似をする者はいなくなる。見張りとは、そういう使い方もできる。

ザムの観察と聴き取り ―― ロウェン（得意：金の流れを読む）◆ [4, 5] → 5、成功

ザムは、意外なほどあっさり取引を見せた。隠す理由がない、という顔だ。

「止めに来たんじゃないのかい、監査官さん。……見せるのは構わねえよ、儂は正規の商いをしてるんでね」

押さえた数字はこうだ。

- 買値は一律、**額面の+15%**。支払いは現行ソルと、端数分の銀貨
- 検めは**重量だけ**。品位の鑑定はしない ―― 「刻印と目方が合えば金だ。それが鋳造所の信用ってもん

だろ」
- 仕分けがある。**すり減っていない金貨は銀秤堂へ+25%で下ろす**。減ったものは別の両替商へ、もっと安く
- 彼は銀秤堂の手の者ではない。独立した行商人で、あくまで一番高く買う先へ売るだけだ
- 袋の中は今日だけで**11枚**。明朝、町へ持って下りる予定

そして台帳の第一号も取れた。川向かいの農夫**ボル**、14時半頃、金貨3枚、対価は3ソルと銀貨で0.45ソル分。売主・時刻・枚数・金額 —— ロウェンの台帳に、流出の記録が始まった。

ただし、観察している間にも列は進む。村の女が1枚、若い男が1枚。**袋の中は13枚になった。** 記録は正確になっていくが、金は村を出る準備を整えていく。記録と流出は、同時に進むのだ。

・　・　・

一方、その橋のたもとで、リセが別の商談を始めていた。

「すいません、この馬いくらですか？」

葦毛の雌馬、炭運びの荷馬だ。持ち主は鍛冶屋の**ダン** —— 最初の一枚を拾ったミロの父親である。男はリセと、後ろに立つギルドの一行を見比べて、答えた。

「売るなら、**12ソル**だ」

コーテリ、ここで監査が入る。準備費の残枠は、現地雇用と追加装備の分で**9ソル**しかない。12は3ソル超過する。準備費の上限20は硬いし、超過分を回せる別の財布は今のところない —— 灰狼団の60は全額、彼らのものだ。

ただしダンは、商売人の顔で付け加えた。「……だが、貸す話なら別だ。馬と、扱える人間ごと雇うんならな」

現地雇用として馬と人手を借りる形なら、準備費の使途にぴたりと合う。買うか、借りるか、やめるか。そもそも何に使う馬なのか —— ロウェンの足か、川原の荷運びか、それとも別の目論見か。リセの狙いを聞かせてくれ。

・　・　・

止める。机の上は三つ。

1. **馬** —— 12ソルで買う（枠超過、要工夫）／馬と人を雇う／やめる（コーテリの判断）
2. **ザム** —— 買い付けは継続中。このまま記録を続けるか、何か手を打つか（ロウェンの判断）
3. **ガルト** —— リセの聞き取りは、まだ杭のそばのあの男に届いていない

M

今からこのグレイが皆さんの書類仕事でお役にたつので2ソルにまけてください

G

「今からこのグレイが皆さんの書類仕事でお役に立ちますので、2ソルにまけてください」

……と言いたいところだが、12ソルの馬を2ソルで買うのは、さすがに会計監査官の信用を損ねるな（笑）。

ただ、ダンさん。少し相談させてください。

「私はギルドの会計監査官です。今回の調査では、村の取引記録や金貨の管理、調査報告書の作成が必要

になります。もし馬を貸していただけるなら、その代わりに帳簿や取引記録の整理をお手伝いできます」

「現金2ソルに、書類仕事の報酬を加える形ではどうでしょう？」

馬の扱いはダンさんにお願いする。こちらは足の負傷もあるし、専門家に任せる方が安全だ。

ただし、準備費から支出する以上、現地雇用として契約と記録を残したい。

馬を買うのではなく、村の人手と馬を借りる。双方に利益がある契約にしたい。

K

コーテリ、その開き直った値切りを、まず馬の持ち主の反応から報告しよう。

ダンは吹き出した。「嬢ちゃん、12の馬を2にまけたら、馬が怒る」

そこでロウェンが杖をついて前に出て、正規の形に直した。買うのではない、雇うのだ。現金2ソルに、ギルド監査官による帳簿と取引記録の整理という役務を加える。馬の扱いはダン自身に任せ、現地雇用として契約と記録を残す —— 監査官の信用を損ねない、筋の通った提案だった。

馬の雇用交渉 —— ロウェン（得意：契約と交渉）◆ [1, 2] → 2、失敗（ただし収穫あり）

ダンは首を振った。だが、その断り方が収穫だった。

「監査官さん、あんたの紙仕事はありがたい。だがな、今の村じゃ、**人手は金より高い**んだ」

彼の言うことは、数字で正しい。普段なら日当0.3ソルほどの村の人手が、今は違う。川に入れば金貨が拾えるかもしれない週に、他人のために働くなら、誰もがその分を上乗せして考える。鍛冶屋にも、篭と道具の修理が殺到している。現金2ソルでは、彼の機会費用に届かないのだ。砂金争いは、村の賃金をもう跳ね上げている —— ロウェンの台帳に、村の経済の第一の数字が書き込まれた。

そしてダンは、声を落として本音を一つ置いた。

「……金より欲しいのはな、うちのミロが最初の一枚を拾ったってことを、**本当だと書いた紙**だ。ガルトは『共有地のものだ』と言う。だが最初に川で拾ったのは、あの子だ。その紙があれば、親父は胸を張れる」

なるほど。ダンの値段は、現金だけでは買えないところに付いていた。発見者と取引の公式記録 —— それはロウェンが調査としてどのみち作るものであり、村に写しを残すことは、彼にとって金に換えがたい対価になる。条件を足せば、この契約は締まるだろう。出目は失敗だったが、失敗が相手の本当の価格表を見せた。

なお、その交渉の間にもザムの列は進んでいた。袋の中は**14枚**。

・　・　・

そして、杭の並びの方から、男が一人こちらへ歩いてくる。

自分の打った杭を背にして、鍛冶屋とギルドの一行が話し込むのを見ていた男 —— **ガルト**だ。村長の弟。共有地の決まりを盾に、ミロの金貨を取り上げようとした当人。

リセ、君の聞き取りは、どうやら相手から先に始まるらしい。

ここで止める。ガルトが目の前に来る。

M

（一目で権力者と見抜く）

へへ、旦那様…何かお困りではありませんか

G

（ガルトが近づいてくるのを見て、杖をつきながら少し後ろへ下がる。リセに視線を向ける）

……なるほど。あちらから来たか。

（小声でリセに）

「相手が村長の弟なら、まずは話を聞いてみてくれ。私はダンさんとの話をまとめたい。ミロの発見記録を残すことは、調査上も重要だ」

（それからガルトに軽く会釈する）

「ギルドの会計監査官、ロウェン・グレイです。村の金貨について調査に来ました。村の決まりについても、ぜひ詳しく伺いたい」

まずは敵対する理由がないことを示す。

そして内心では考える。

――村長本人ではなく、弟が仕切っている。しかも杭まで打っている。

この男は、村の秩序を守ろうとしているのか。それとも秩序を自分のものにしようとしているのか。

K

まず脇の契約から締めよう。ロウェンはダンとの話をまとめた。

発見と取引の公式台帳を作り、写しを村に残す —— その条件を足した途端、ダンの手が伸びた。

「それでいい。現金2ソル、馬と儂が付く。……ミロにも言っておく。明日の朝、最初の一枚を拾った場所を、あんたたちに案内させる」

現地雇用契約、成立。 準備費から現金2ソルを支出し、残枠は7ソル。ロウェンの川原の移動は、馬に補助させることができる。台帳の写しは村に残る —— ダンの息子の名誉と、調査の証跡が、同じ紙で守られる契約だ。

・　・　・

そして本命。ガルトが一行の前に立ったとき、リセは一目で見抜いた顔で、こう開いた。

「へへ、旦那様……何かお困りではありませんか」

ガルト聞き取り —— リセ（得意：本音を引き出す）◆ [2, 5] → 5、成功

効いた。ガルトの胸が、目に見えて少し張った。この村で彼を「旦那様」と呼ぶ者は、そう多くないのだろう。彼は杭の並びを顎で示しながら、よく喋った。

「困るも何も、ギルドの人が来てくれて助かる。見ての通りだ、川原はわしが仕切らなきゃ、収まりがつかん。共有地の決まりだ。川から出たものは村のもので、村長が管理する。昔からの決まりだよ」

リセ、君の耳にはこう届いたはずだ。

・ 決まり自体は本物だ。だが彼が挙げる昔の例は、流木と、葦と、魚のことばかり。**金貨の例は、一つ**

も出てこない。 共有地の決まりを金貨にまで広げたのは、この男の解釈だ
- 村長 —— 彼の兄は、金貨騒ぎの前から**病床にある**。不在の理由はそれだった。「兄貴には村を頼まれた」と彼は言う。だがリセが「金貨の杭のことも、村長さんはご存じで？」と笑顔で添えたとき、答えが少し速すぎた。「いちいち起こして聞くようなことじゃねえ」—— 具体的な承認は、ない。君にはそう読めた
- ミロの件では、彼は事実を争わなかった。「ガキが拾ったのは本当だ。だが共有地で拾や、村のもんだ」争点は事実ではなく、解釈だけだ
- 橋に近い良い区画は、彼の身内が押さえている。隠しもしない。「身内は信用できるからな」
- そして金銭の抜きは、今のところなさそうだ。この男の賞品は金ではない。**仕切っている、という権威そのものだ**

だからこそ、最後に彼は逆に要求してきた。

「ギルドの旦那さん方。あんたたちが、わしの仕切りを『村の秩序だ』と認めてくれれば、村は収まる。無法なのは、勝手に売り歩く連中の方だ」

杭を握る手に、力が入った。—— ザムの方を、ちらと見て。

日が傾いてきた。ザムの袋は**15枚**。店じまいの支度を始めている。明朝、彼はその15枚を持って町へ下りる。

・　・　・

ここで止める。夕方の判断は三つ。

1. **ガルトの公認要求** —— 認めるか（彼の拡張解釈にギルドの判子を押すことになる）／村長とギルド本部の裁定まで保留するか／断るか
2. **ザムの15枚** —— 明朝このまま町へ流すか（銀秤堂への流れは追える。だが金貨は村を出る）／何か手を打つか
3. **今夜の宿** —— 村のどこに泊まるかで、夜の情報の入り方が変わる

どうする、二人とも。

M

そもそもなんですけどぉ〜

王都近隣地区で公有地で王の所有地ですよね？

もし行政に連絡したら村のもの個人のものでもなく国庫に入ると思うんですけど〜

G

（リセの発言を聞いて、少しだけ口元を緩める）

……なるほど。行政権と所有権の話か。面白い切り口だ。

ただ、リセ。そこは少し慎重に扱おう。

「ガルトさん、一つ確認させてください」

「この村の川原が共有地であることと、川原から発見された金貨の所有権が村にあることは、同じ話ではありません」

「仮に王領の公有地であったとしても、そこから発見された金貨が当然に国庫へ帰属するのか、拾得者に

帰属するのか、あるいは別の法令が適用されるのか。それは確認が必要です」

そして、ガルトに問いかける。

「村長の管理権限については理解しました。しかし、村長の管理権限は、国王の所有権や王都の行政権より優先されるのでしょうか？」

「その根拠となる王令、あるいは村の認可状はありますか？」

私は現時点でガルトの主張を公認しない。

所有権の裁定は保留。 王都の行政官とギルド本部に照会するべきだ。

ザムについては、今夜のうちに15枚の取引記録と買い取り先を確定させたい。没収や売買停止を命じる権限がこちらにあるとは思わない。だが、明朝の出荷前に銀秤堂への流れを追えるようにしておく。

最後に、ガルトへ。

「あなたが村の秩序を守ろうとしていることは分かりました。しかし、秩序を守ることと、所有権を決めることは別です。ギルドの判子を急ぐ必要はありません」

（杖をつき直す）

「それから、今夜は村長にお会いしたい。ご病状に差し支えない範囲で、正式な意思を確認させてください」

――金貨の所有権を決める前に、誰が決める権限を持っているのか。それを確定させるのが先だ。

K

コーテリ、その「そもそも」は実にいい隅のつつき方だ。答えられる範囲で、帳簿を開こう。

君の指摘は**半分正しい**。エルムの土地の究極の所有は王にあり、しかもヴェルドには**埋蔵金の古王令**がある ―― 地中に埋められた金銀財宝は王に届け出て、王庫が検分する。発見者には慣例で1割の礼金。だから「行政に言えば国庫に入る」という読みには、根拠がある。

だが、ロウェンの慎重さも正しい。法は三つ巴なのだ。

1. **貨幣の原則** ―― 王の刻印ある金貨は、持つ者の金として額面で回る。一枚の金貨は財宝である前に貨幣で、村人が拾って売る日常はこの原則に支えられている
2. **埋蔵金王令** ―― ただし対象は「埋められた財宝」。川を流れてきた金貨がそれに当たるか、**前例がない**
3. **村の認可状** ―― エルムには先々代王の認可状があり、川と山の共有地の管理は村長に認められている。ただし文面が及ぶのは「恵み」までで、金貨のことは書かれていない

そして一番深い未決点が残る。この金が無主の財宝ではなく、**竜という所有者の財産**だとしたら、王令の前提そのものが崩れる。ヴェルドの法のどこにも、竜の権利は書かれていない。―― ここは未整備のまま、物語の核として置いてある。世界の帳簿には、今の三つ巴を「確定した法の骨格」として書き加えた。

ロウェンの問いに、ガルトはこう答えた。

「認可状なら、兄貴の家にある。今夜にでも見せてやる。……だが判子を押さないなら、ギルドは何しに来たんだ」

ロウェンの裁定は明快だった。**公認しない。所有権の裁定は保留し、王都の行政官とギルド本部に照会する。**「秩序を守ることと、所有権を決めることは別だ」―― ガルトは杭を握りしめたが、反論の根拠は持っていない。杭と仕切りは現状のまま残る。ギルドは認めもせず、撤去も命じなかった。事実上の現状維

持だ。

ザムの記録も、今夜のうちに締まった。店じまい前の彼が台帳に協力して残した内訳は ―― **15枚のうち未摩耗12枚は銀秤堂へ、摩耗した3枚は別の両替商へ**。明朝出荷。没収も売買停止も、一行には命じる権限がない。だが金の流れには、もう目が付いている。

一行の宿は村唯一の宿、エルム亭。ザムも同じ宿だ。

・　・　・

夕食の後、宿の戸を叩く者があった。

村長の妻だった。薬湯の匂いのする女が、静かに言った。

「旦那が……村長が、ギルドの方々にお会いしたいと。弟には内緒で来ました。父さんの話を、直接聞いてやってください」

病床の村長本人が、弟を通さずに一行を呼んだ。

ガルトがこのことを知ったら、いい顔はしないだろう。

・　・　・

ここで止める。今夜の次の場面は、村長宅だ。

認可状の実物と、村長の正式な意思 ―― 「誰が決める権限を持つのか」の、最初の答えがそこにある。

M

せっっっっっっかく私が「これこのままにすると王都に没収されるけど、どうする？」

って利益三分割の方向へもっていこうとしたのに馬鹿正直に連絡員飛ばす人があります！？

G

……。

（しばらく黙ってから、リセに小声で）

「なるほど。そういうことか。王都に報告すれば、村人は金貨を失う可能性がある。だが、報告しなければ王令違反になる可能性がある」

「つまり、村人にとっては、王都の介入を避けながら、発見者の利益も守れる仕組みを作ることが重要なんだな」

（苦笑する）

「君は最初から三分割の落としどころを探していたわけか。私が法的な正しさを追いかけている間に……」

ただ、まだ手遅れではない。

村長に会うのは好機だ。

今夜、私は認可状の文面と村長の意思を確認したい。特に、村長が村の利益をどう考えているか。

そして、リセと二人で話せる機会があれば、こう提案したい。

「王都への全面的な引き渡しでも、村による独占でもない。発見者、村、王庫の三者が利益を得る暫定的な管理方式は考えられないだろうか」

ただし、竜の所有権が判明するまでは、分配を確定させない。

三分割は、まだ捨て札じゃない。

……コーテリ、次は君の交渉術に期待しているよ。

K

コーテリ、抗議は受けた。だが弁護もさせてくれ —— **連絡員は、まだ飛んでいない。**

ロウェンがガルトの前で述べたのは照会の「方針」だ。正式な照会は、帰還の報告書に同封されて初めて王都へ行く。通常の手続きでは、そうなる。つまり報告のタイミングは、まだ君たちの手の中にある交渉変数だ。

そして面白いことに、君のカードはロウェンの馬鹿正直があって初めて効く。「このままでは没収されるぞ」という脅しは、本当に報告しかねない正直な監査官が隣に立っているからこそ、村の人間の背筋を伸ばす。交渉役と、正直者。役割分担としては、むしろ出来上がっている。

宿の隅で聞いていたブリアが、短く言った。「監査官の正直は、脅しに使うとよく効くな」

グレイ —— 君の整理も帳簿に載せた。**三分割は捨て札じゃない。** 発見者・村・王庫が利益を得る暫定的な管理方式を二人で探る。ただし竜の所有権が判明するまでは、分配を確定させない。その留保は正しい。所有者の分を先に分けてしまえば、後で全部ひっくり返る。

・　・　・

村長宅、夜。

出向いたのはロウェンとリセの二人だ。灰狼団は宿に残った —— ザムと同じ宿に泊まる以上、夜の見張りは自然に効く。

村長の妻に案内された病室は、薬湯と古い紙の匂いがした。村長**オットー**は、寝床に上体を起こしてもらっていた。痩せて、声も弱い。だが目は澄んでいる。枕元の棚には、革紐で縛った木箱 —— 認可状の箱だろう。

老村長は、挨拶が済むとすぐに本題を切った。ガルトの話は聞いた、と彼は言った。その上で、こう続けた。

「だが、あれは弟の目で見た話だ。あんたらは今日、川原に立った。……まず聞かせてくれ。川で何が起きているのかを」

そして、正確な問いを一つ。

「金貨は今までに何枚、村の外へ出た？」

ロウェン、君の台帳には答えがある。ギルドへ届いた見本1枚と、ザムの袋の15枚。村長は名前と数字を間違えない種類の老人だ —— ごまかしは、すぐに分かると思った方がいい。

・　・　・

ここで止める。病室の机の上は、こうだ。

- 村長は事実を求めている。ザムの流出も、銀秤堂の買い集めも、まだ彼は知らないはずだ
- 認可状の箱は枕元にある。開けるかどうかは、村長の意思次第だ
- 三分割の腹案は、まだ誰の口からも出ていない。今夜出すのか、村長の意思を聞いてからか

何を、どこまで話す。二人の判断だ。

M

あーあー！せっかく人が穏便に収めようとしたのにどっかのバカ真面目が王都に連絡員飛ばそうとしてるから

この村しばらく直轄管理されて全て調べ上げられて現状行政側に全部知られちゃうなーーーー！！！

あーーーーあーーーーーーーー！！(村長宅の近くで大声)

G

（台帳を開き、村長の前に置く）

「確認できている範囲では、ギルドに届いた見本が1枚。ザムという行商人が買い取ったものが15枚。合計16枚です」

「ザムの15枚のうち、12枚は銀秤堂へ、残る3枚は別の両替商へ流れる予定です。明朝、村を出るとのことでした」

少し間を置く。

「ただし、これは確認できた流出数です。村人が個別に持ち出した分や、別の買い手との取引は、まだ把握できていません」

そして村長の目を見る。

「村長、私からも一つ伺いたい」

「あなたは、この金貨をどうしたいとお考えですか？」

「村の共有財産として守りたいのか、拾った人の権利を認めたいのか。それとも王庫に届けるべきだとお考えなのか」

「私はギルドの監査官です。確認できた事実を隠すつもりはありません。しかし、事実を報告することと、村の利益を守る方法を探すことは両立できると思っています」

（枕元の木箱に目を向ける）

「認可状も拝見できますか。弟さんの解釈ではなく、村に認められた権利を正確に把握したいのです」

――今夜は、村長の意思を聞くことが先だ。三分割の話は、その答えを聞いてからでも遅くない。

K

コーテリ、まず報告だ —— 君の大声は、病室の中までよく届いていた。

村長オットーは寝床から、開口一番にこう言った。

「娘さん、声が大きいな。……それも仕事か」

見抜かれている。だが内容は真実だ。だから圧力として成立した。村のどこかで窓の閉まる音がしたが、今夜のところ、駆け込みで金貨を売りに走る村人はいなかった。ザムはもう店を閉じていたからな。

圧力演技 —— リセ（得意：場を動かす）◆ [2, 5] → 5、成功

そしてロウェンの台帳報告が始まった。確認できた流出は16枚。ザムの15枚の行き先の内訳まで。老村長は数字を聞き違えず、一つだけ頷いて言った。「売ってしまった分は、追うな。止めれば村人の敵が増えるだけだ」

村長の意思は、ロウェンの問いにこう答えた。

「わしが怖いのは、金で村が割れることだ。ミロのようなガキが、弟からも王都からも奪われるのも見たくない。……王庫に納める分は納める。それで王都が直轄に来ないで済むなら、なおいい。**三方に立つ形があるなら、わしは判を押す**」

三分割という言葉は、まだ誰も口にしていない。だが受け皿は、村長の方に用意されていた。

認可状は、妻が枕元の箱を開けて広げた。先々代王の印。文面は、川と山の恵みと —— **「川の落とし物の差配」**を、村長に認めるものだった。

オットーは弱い声で、しかし正確に言った。

「差配とはな、預かって、困らんように分けることだ。わしのものにする免許じゃない。……弟は『管理』を『所有』と読み替えた。わしは、そう教えた覚えがない」

そして彼は、箱の底から布包みを出させた。**ミロの拾った、最初の一枚**だ。ガルトが「村の預かり」として納めたものが、ここにあった。

「監査官さん、あんたの台帳に書いてくれ。預かり品だ、と。拾ったのはミロ。預かるのはわし。持ち主は —— まだ決まっていない」

ロウェンの台帳に、預かりの第一号が記録された。所有が発見者に認められる日が来れば、この一枚は真っ先に少年へ戻る。ダンの望んだ「公式の紙」は、こうして村側にも生まれた。

最後に、老村長は目を閉じたまま、古い話を一つ置いた。

「わしの祖父の代にも一度だけ、金貨が二枚、川を下った年があった。年寄りどもは言ったよ。**竜が寝返りを打った**、とな。……川に金が出た年は、山に近づくな。村の言い伝えだ」

面会は、彼の疲労で終わった。表向きは「ギルドが村長の見舞いに来た」 —— それで通すことに、妻と口裏を合わせた。

・　・　・

宿に戻った。夜だ。ここで止める。

明日の札は三つ。

1. **ザムの出発** —— 明朝、15枚を持って町へ下りる。見届けて記録を締めるか、何か声をかけるか
2. **三分割の暫定案** —— 村長の受け皿は確認できた。案を二人で練って提示するのは、いつ、誰に、どの形でか
3. **源流調査** —— ミロが最初の一枚を拾った場所を案内する。川を遡る調査の始まりだ。ただし村の言い伝えは「山に近づくな」と言っている

どう進める、二人とも。

M

ブリア達から金を巻き上げるためにカードを挑みに行く

G

「……リセ。明日の調査資金に手をつけるつもりじゃないだろうな？」

（台帳を閉じ、少し呆れた顔で立ち上がる）

「ブリアは金勘定に厳しい。賭けに応じるとしても、勝負の条件はきっちり決めてくるはずだ。こちらが巻き上げるつもりで行って、逆に財布を空にされたら笑えないぞ」

（少し考えてから）

「まあ、私は止めない。見物させてもらおう。必要なら賭けの条件と精算だけは監査する」

「ただし、明日の仕事に響かない範囲でな。」

K

ロウェン、君の心配はもっともだが、条件設定は見事だった。勝負の前に、監査官が台帳の余白へこう書いた。

今夜の賭けの条件 —— 賭け金は各自の小遣いのみ。準備費・前払い・保険金には手を付けない。ツケ禁止。精算はその場で、現金で。

アンセルムが横から一文足した。「賭博の損失は、保険の対象外です」

では、エルム亭の卓。遊戯は宿場の定番、はったりのカード勝負だ。

カード —— リセ（得意：人の顔色と嘘を読む）◆ [4, 5] → 5、成功

結果から言えば、コーテリ、巻き上げは半分だけ成功した。

ペルは —— 完敗だった。彼は手札の強さを、ついノートに書き留める。読むまでもない。サシャは銅貨の耳飾りを触るのが癖だが、時々わざと触る女で、半分までしか読めなかった。

そしてブリア。**顔が、まったく読めない。** しかも彼女は金勘定に厳しい女の降り方をした —— 流れが悪いと見るや、早々に全部降りて、それ以上は一文も置かない。損失を最小化することと、利益を最大化することは同じではない。どこかで聞いた言葉だな、グレイ。

精算はロウェンの監査どおり、その場で締まった。

- リセ **+1.6ソル相当**（銀貨で受け取り）
- ペル −1.1（自分の取り分を、泣きながら数え直している）
- サシャ −0.5
- ブリア **±0** —— 無傷

ブリアはカードを伏せて、リセに言った。「あんた、聞き取り係の顔じゃないな。賭場に座る顔だ」

責めているのではない。あれは彼女なりの認定だ。距離が、半歩縮んだ。

隅ではザムが見物していた。彼は賭けには乗らない。彼の金は全部、明朝の袋の中の金貨に張ってある。

・　・　・

夜が更けた。ここで止める。

明日は夜明けから動く。札は変わらず三つ —— ザムの出発、三分割案の提示、ミロの案内での源流調査。

休むなり、夜のうちに案を練るなり、好きに使ってくれ。

M

夜通し負け組どもを煽りまくる

G

（夜更け、ペルが何度目かの敗北額を数え直しているのを横目に、帳簿へ結果を書き込む）

「ペル、もう一度数えても勝ち分は戻ってこないぞ。数字は逃げないが、失った銀貨も戻ってこない」

（ブリアに目を向け、少し笑う）

「さすがだな。勝負の流れが悪いと判断した時点で撤退する。損失を限定するという意味では、今夜一番の勝者は君かもしれない」

（リセの勝ち分を確認してから、台帳を閉じる）

「リセ、1.6ソルの利益か。悪くない成果だ。もっとも、明日の調査でその何倍もの価値がある情報を引き出してくれることを期待しているよ」

（椅子から立ち上がり、杖を手に取る）

「私はもう休む。足もまだ本調子じゃない。明日はザムの出発を記録した後、ミロの案内で源流を調べたい」

「三分割案については、今夜のうちに数字だけ整理しておこう。村長が判を押す意思を示した以上、提示する案は必要だ。ただし、竜の所有権が不明なまま確定配分に見える書面は作らない」

（最後に、ブリアへ）

「それとブリア。今夜の賭けは君の勝ちだ。降りる判断まで含めてね」

「おやすみ。明日は金貨の出所を探そう。今度はカードじゃなく、川の流れを読む仕事だ」

K

夜の部は、リセの煽りで締まった。ペルは負け額を数え直すたびに新しい絶望を発見し、サシャは「明日、川で取り返す」とよく分からない宣言をし、ブリアは —— 煽りが一番効かない顔で、酒を飲んでいた。

ロウェンの「今夜の勝ちは君だ」に、彼女はこう返した。

「勝ち分ゼロの勝ちか。……悪くない言い方だ、監査官」

そしてロウェンは休む前に、言っていたとおり数字だけを整理して、一枚の紙をリセにも見せた。**三分割の暫定案、叩き台**だ。

- **まず分配ではなく、保管** —— 今後見つかる金貨はギルドの台帳に登録し、所有権が決まるまで村長預かりで凍結する。誰の手にも渡さない
- **配分の叩き台**（和解が成立した場合）—— **発見者 1/2、村の共有基金 1/4、王庫 1/4**。古王令どおりなら王庫が9割、発見者は礼金1割だ。その没収シナリオとの差が、村と発見者が席に着く理由になる
- **売却済みは追わない** —— ザムの15枚と見本1枚は対象外。過去を掘り返すと、村の全員が敵になる
- **登録が条件** —— 台帳への登録に協力した金貨だけが和解の利益を受ける。隠した金貨は、王都が来たときに守ってもらえない
- **ガルトの扱い** —— 区画の管理は「秩序の管理人」として暫定的に認める。だが所有を決める権限は、与えない。彼の公認要求への折衷だ
- **竜の留保** —— 金蔵の持ち主が竜だと判明したら、この案は全部無効になる。その場合、保管した金貨は没収の対象ではなく、交渉の原資になる

確定配分に見える文面には、なっていない。だが村長が判を押すための「形」は、これで用意できた。提示の順序と口上は —— コーテリ、君の交渉術の出番だ。

ロウェンは杖を壁に立てかけ、休みに入った。足の捻挫は、明日の朝には少しはましになっているだろう。

・　・　・

夜が明ける。ここで止めるのが一番きれいだ。

次は夜明け、ザムの出発から。 15枚の金の流れを記録で締めて、それからミロの案内で川を遡る。

時間のあるときに、続きをやろう。

M

は〜い

K

はーい、と来たな。では夜明けから再開だ。

・　・　・

第三景「主の淵」

夜明け前、エルム亭の前。ザムはもう荷をまとめていた。

ロウェンが杖と台帳を持って立つと、行商人は帽子を取って、商売人らしくきちんと頭を下げた。「監査官さん、邪魔されなかった礼に、一つ置いていくよ」

「銀秤堂の若い衆が言ってたんだ。『**川の金は、まだ出始めだ**』ってな」

彼は15枚の袋を荷に括り、町への道を下っていった。未摩耗12枚は銀秤堂へ、摩耗した3枚は別の両替商へ。ロウェンの台帳で、流出の記録が締まった。

だが、あの一言は残った。買い手は、川の金がこれからも出てくると見込んでいる。観測か、確信か ——それとも、出てくるようにする算段か。

・　・　・

村を出て、ミロの案内で川を遡る。ダンが葦毛の馬を引き、ロウェンは馬上だ。捻挫は昨夜よりましだが、川原を歩き回る足ではない。

約40分。渓流が岩に挟まれて、急に深く、静かになる場所があった。

「ここだよ」ミロが砂利の岸を指した。「**主の淵**。あの日、雨の次の朝に、ここで光ってた」

村の子はこの淵では泳がない。大きな主が棲むのだという。ミロは少し得意げに、少し怖そうに、付け加えた。

「あの朝、水がちょっぴり生温かったんだ。鉄みたいな匂いもした。……おじいちゃんには言うなよ。淵の話をすると怒るから」

そして分布調査の最初の事実が、足元にある。

金貨が見つかったのは、全部この淵より下流だ。 ガルトの杭の区画も、全部下流。淵より上では、まだ一枚も出ていない。

金の入り口は、この淵そのものか、それより少し上か。オズが淵を覗き込んで、触媒の袋に手をかけながら原価を呟き始めている。サシャはもう岩場の周りを目で測っている。

・　・　・

ここで止める。主の淵のほとりだ。

調べ方は選べる。

- **オズの探知魔法** —— 淵の中に何があるか。ただし触媒の原価がかかる。彼は「一回分、安くはない」と言っている
- **サシャの目視** —— 岸と岩場に、割れ目や脇の水路がないか
- **分布の測量を先に** —— ロウェンとダンが下流の発見地点を全部記録し、入り口を数字で絞る。地味だが確実だ
- **リセの聞き取り** —— ミロと村の古老から、主の淵の言い伝えをもっと聞く。子の言う「生温い水と鉄の匂い」の裏付けになるかもしれない

どうする、二人とも。

M

半分徹夜だったのでまだ寝ている

G

（馬上から淵を見下ろし、ミロの言葉を手帳に書き留める）

「生温かい水、鉄の匂い……。それに、金貨はすべて淵より下流で発見されている」

（川の流れを眺める）

「偶然とは考えにくいな。金貨が上流から流れてきたのなら、淵が供給源である可能性は高い」

「ただし、いきなり魔法で探るのは待ってほしい。オズの触媒は経費だ。何が分かれば成功なのか、探知の範囲と対象を先に確認したい」

（台帳を開き、ダンに向き直る）

「私はまず分布の測量をしたい。下流の発見地点と枚数、淵からの距離、川の流れ、地形を記録する。ミロが最初に拾った場所も正確に記す」

「サシャには岸と岩場の目視を頼みたい。水の流れが不自然な場所や、岩の割れ目、脇の水路があれば教えてくれ」

（オズに視線を移す）

「その結果を見てから探知魔法を使うか決めよう。金貨の出所を探すのに、最初から財布の中身まで探られる必要はないからな」

「それと、ミロ。生温かかった水と鉄の匂いは重要な証言だ。覚えている範囲でいい。いつもの川と、どれくらい違った？」

K

まず村側の様子から。リセはまだ寝ている。

ペルが起こしに行こうとして、ブリアに止められたそうだ。「聞き取り係は夜の仕事をした。寝かせておけ」—— 彼女の言う「夜の仕事」に、カードの勝ち分が含まれるかどうかは、問わないでおこう。村組はブリア、アンセルム、ペルで区画を回り、発見の申告を集めている。

上流組は、ロウェンの方針どおりに進んだ。魔法はまだ使わない。まず数字だ。

分布測量の結果（午前いっぱい）

村側の申告とロウェンの台帳を突き合わせると、形が見えてきた。

・ 発見は4日で、申告ベース**約31枚**。うち流出確定16枚、村長の預かり1枚、残りは村人の手元
・ 分布は淵の下手、約200歩の範囲に集中し、下流へ行くほど薄くなる。**淵より上はゼロ**
・ 発見は大雨の翌日に偏っている。その後は、同じ砂利を掘り返しての小さい発見ばかり

つまり金貨は、川のどこかから絶えず漏れているのではない。**増水のたびに、淵からまとめて吐き出されている。** 入り口は淵の内部で、ほぼ確定だ。

サシャの目視

彼女は岩場を回って、北側の岩壁を指した。

「水面の高さに、割れ目がある。川の流れとは別に、そこから水が湧いてる。……それと、触ってみな。割れ目の近くの水、他より温い」

ミロの証言と一致する。割れ目の下の岩には、新しい白い擦り傷が数本。何か重いものが、水中で岩を擦った跡に見える。

ミロはロウェンの問いに、こう付け加えた。

「いつもは足が痺れるくらい冷たいんだよ、あの淵。あの朝は平気だった。匂いはね、父ちゃんが熱い鉄を水に入れたときの匂い。……あと、淵の真ん中で、一回だけ、大きな泡がボコッて出た」

オズの回答 —— 探知魔法の仕様

ロウェンが先に範囲と対象を問うたので、オズは珍しく嬉しそうに仕様を並べた。「呪文の前に原価と射程を聞く客は初めてだ」

・ 金属の大きな塊を探る。射程は約10歩。水は通すが、厚い岩は通さない
・ 金貨と他の金属の区別はできない
・ 触媒は1回**1.2ソル**。反応がなくても燃える
・ 無反応でも、「岩の向こう」や「射程の外」を否定はできない

成功の定義も決められる。割れ目の先10歩以内に金の塊があるかどうか —— それだけを問う一回分だ。

・　・　・

昼、主の淵で止める。

割れ目は見つかった。水は温く、岩には新しい傷がある。オズの探知は1.2ソルで、問える範囲は割れ目の先10歩まで。

・ **探知魔法を使う** —— 1.2ソルを払って、割れ目の先に金属の塊があるか問う
・ **サシャが近づく** —— 縄を付けて割れ目の口まで。目視と手探り。ただし「主の淵」の主に、まだ正体が割れていない
・ **増水を待って観察** —— 金は増水で吐き出される。次の雨か、水の動きまで張る。時間はかかるが金はかからない
・ **一度村へ戻る** —— 寝ている聞き取り係を起こし、古老の言い伝えを固めてから出直す

ロウェン、査定は君の仕事だ。

M

ようやく起き出してみんながいないことに気が付く

まだ寝れるじゃん…

二度寝

G

（測量結果を台帳にまとめ、北側の割れ目をじっと眺める）

「なるほど。これで仮説はかなり絞れた」

「大雨の翌日にまとまって出る。淵より上流には一枚もない。割れ目から温水が湧き、岩には新しい擦過痕。何かが淵の内部にいて、増水の際に動いている可能性がある」

（オズに向き直る）

「探知魔法を頼みたい。1.2ソルは安くないが、今の段階なら十分に価値がある」

「ただし、反応があっても、それが金貨とは限らない。金属の塊があるという情報だけだ。そこは間違えないようにしよう」

（ブリアたちにも聞こえるように告げる）

「サシャ、まだ割れ目には入らないでくれ。探知の結果を待とう。未知の生物がいる可能性を考えれば、先に危険を増やす必要はない」

（少し間を置いて）

「それと、リセが戻ってきたら、古老への聞き取りを頼みたい。村の言い伝えと、過去に金貨が出た年の話を照合したいんだ」

「ではオズ、1回頼む。結果は良くても悪くても、そのまま記録する」

K

まず村の宿から、短い報告を。リセは一度起きた。

皆がいないことに気づき、「まだ寝れるじゃん」と判断して、**二度寝に入った**。聞き取り係の優先順位付けは、ある意味で正確だ。ロウェン、君の「古老への聞き取り」の依頼は、彼女が戻ってくるまでの預かりとする。

では淵だ。オズが割れ目の見える岩に座り、触媒を取り出した。

探知魔法 —— オズが詠唱（触媒1回分を消費）

金の出所を先に言えば、これは新規の支出ではない。前払いの消耗品費の中の、オズの触媒在庫からの消費だ。ただし在庫の数字は変わる。彼の携行分は照明2、探知1、退避1だった —— **探知はこれでゼロになった**。次に探りたければ、町まで触媒を取りに戻る話になる。

オズは目を閉じ、指先を水のほうへ向けて、やがて言った。

「……ある。割れ目の先、5、6歩。こっちの岸より下、水の中だ」

「規模は —— 金貨で数えるなら、**百枚単位**の金属だ。袋どころじゃない。淵の底そのものには、大きな反応はない。溜まっているのは、割れ目の向こう側だ」

ロウェン、君の留保は台帳にそのまま書かれた。これは「金属の塊がある」という情報で、金貨の証明で

はない、と。

だが、オズは最後に首を傾げた。

「一つだけ、妙なことがある。詠唱の間に、塊の**端がわずかに動いた**。……水の流れで緩んだ金貨が転がったのかもしれない。だが、そうじゃない顔もできる動きだった」

サシャは縄を手に、ロウェンの顔を見ている。まだ割れ目には入っていない。命令は守られている。ミロは淵を覗き込んで、少し青い顔をしていた。「主、起きたのかな」

・　・　・

ここで止める。判明したのはここまでだ。

- 割れ目の先5–6歩に、百枚単位の金属の溜まりがある
- 淵の開けた底は空。入り口は割れ目で確定
- 塊の端が、わずかに動いた —— 意味は未確定
- 探知の在庫は尽きた。次の情報は、目と手と耳で取るしかない

次の一手は —— サシャに割れ目の口まで近づかせるか（縄付き、覗くだけ）、水温と流量を測って割れ目の性質を数字にするか、村に戻って寝ている聞き取り係と古老の言い伝えを先に固めるか。

ロウェン、どうする。

M

太陽が傾く頃、ようやく起き出した私はゆったりと体を伸ばしてから
気持ちのいい風を感じつつ紅茶を飲む
なんて美しい朝（朝じゃない）なのだろう…

G

（オズの報告を聞き、台帳に「金属塊・推定百枚単位・割れ目の奥5〜6歩」と記す）

「……動いた、か」

（しばらく水面を見つめる）

「金貨が水流で動いた可能性はある。だが、百枚単位の塊が自ら動いた可能性も捨てられない。今の情報で中に入るのは危険だ」

（サシャに向き直る）

「縄を付けて割れ目の入口まで近づくのは構わない。ただし、今日は覗くだけだ。中に身体を入れない。何か動いたら即座に退避してくれ」

「アンセルム、退避時に怪我人が出た場合の準備を頼む。ブリアは全員の退路を確保してほしい」

（ミロにも穏やかに告げる）

「君は岸から離れていてくれ。君の証言は十分に役立った。これ以上危険を冒す必要はない」

（最後に川を見ながら）

「金貨百枚より、命一つの方が高い。少なくとも私の帳簿ではな」

K

では二つの場所から。まず村の宿だ。

エルム亭、太陽の傾く頃。

リセはようやく起き出して、体を伸ばし、風に吹かれながら紅茶を飲んでいる。「なんて美しい朝なのだろう」―― 朝ではない。宿の女将が何か言いかけて、やめた。

区画回りから戻ったブリアが通りがかりに、一言置いていった。

「よく寝たな、聞き取り係。古老なら、あの木の下にいる。あんたの仕事が、向こうで茶を飲んで待ってるぞ」

木の下の長椅子では、村の古老が二人、将棋盤のようなものを挟んで座っている。ロウェンから預かった依頼 ―― 言い伝えと、昔の金貨の年の照合 ―― は、彼女の足元で始められる。

・　・　・

主の淵、午後。

ロウェン、君の指示は二つ、現地で組み直しが要った。ブリアとアンセルムは村組で、ここにはいない。君は一瞬それに気づいて、布陣を直した ―― 縄はダン、オズが退避の触媒を一つ握って待機、ミロは馬のそばへ下げる。アンセルムの代わりは、オズの魔法と応急の包帯だ。

サシャの接近 ―― ◆ [5]、成功

縄を腰に、彼女は割れ目の口まで進んだ。身体は入れない。命令どおり、覗くだけだ。

彼女の報告は、斥候らしく正確だった。

- 割れ目は肩幅ほど。水を満たした通路が、中で**上へ登っている**
- 温水の湧き出しは一定で、時々、泡が脈打って上がってくる
- そして ―― 口の縁の砂利に引っかかっていたものを、彼女は鉤棒で掬い上げた

旧金貨、1枚。 先々代の刻印、すり減っていない。

割れ目が金の入り口であることの、初めての物的証拠だ。ロウェンの台帳に「調査標本」として記録された。採取者サシャ、場所と時刻入りで。

その直後、割れ目から泡の湧出が強まった。サシャは即座に退いた。無傷だ。命令を守る斥候と、無理をさせない監査官 ―― 二人の呼吸が合った瞬間だった。

ロウェンの「金貨百枚より、命一つの方が高い」という言葉は、サシャの耳にも届いていた。彼女は何も言わなかったが、縄を畳む手つきが、少しだけ丁寧だった。

・　・　・

夕方になる。上流組は日暮れまでに村へ戻る。

ここで止める。

- リセは村で始動したばかり。古老の木の下へ行くなり、別のことをするなりは、彼女の自由だ
- 上流組の報告 ―― 割れ目の通路、標本の1枚、泡の脈動 ―― が村に届けば、話はまた動く
- 三分割案は、まだ提示されていない。村長の受け皿と、ロウェンの叩き台は揃っている

どうする、二人とも。

M

買い付けた馬に乗って飛ばして走る

G

（夕方、村へ戻りながら、サシャが採取した金貨を布に包んで台帳と照合する）

「採取場所、時刻、採取者。記録は問題ない。これで金貨が割れ目から出てきたことは、かなり強く裏付けられた」

（サシャに向かって）

「よくやってくれた。無理をせず、必要なところで退いた判断も含めてね」

（少し考え込む）

「しかし、泡の脈動が強まったのは気になる。あの奥には、単なる金貨の堆積場ではない何かがあるのかもしれない」

「明日以降の調査は、古老の話を聞いてからにしたい。過去にも同じ現象があったのなら、次の増水を待たずに危険を予測できるかもしれない」

（村の方角を見て）

「リセが古老から何を聞き出すか、楽しみだな」

「それから、三分割案だ。村長の意思と古い認可状、そして今回の発見物。提示する材料は揃いつつある。だが、竜の正体が分かるまでは、保管の原則を崩さない」

「今夜は全員で情報を合わせよう。金貨の話だけでなく、あの淵で何が動いているのかもね」

K

コーテリ、まず帳簿から訂正が入る。**その馬は、買い付けていない。**

葦毛の雌馬はダン付きの現地雇用で、今は上流でダンと一緒だ。鍛冶屋の厩に残っていたのは、荷運びのロバ一頭だけだった。

リセはそのロバに乗って、飛ばして走った —— つもりだった。ロバは飛ばない。あれは自分の速度を何者にも譲らない動物で、結局、日暮れの街道を下ってくる一行と、ロバの速度で合流した。ブリアの評はこうだ。「聞き取り係、帰還。……馬じゃないな、それ」

・　・　・

夜、エルム亭。全員で情報共有。

ロウェンが標本の金貨を布から出し、台帳と照合した。採取場所、時刻、採取者。記録は正確で、サシャへの「よくやってくれた、退いた判断も含めて」は、彼女の耳にも届いた。彼女は耳飾りを一度触って —— あれは照れの癖らしい。今夜覚えた。

村組の報告も上がった。

- 本日、下流で新たに**3枚**発見。全部、淵より下。分布の形と一致する。申告は台帳に登録済み
- ガルトがペルに、上流組の行き先を聞いていた。公式の調査なので、隠す理由はない
- アンセルムは篭で手を切った村人の治療をした。砂金争いの小さな怪我は、もう出始めている

そしてロウェンが、穏やかに言った。「リセ、古老の話は ——」

リセの本日の成果は、紅茶とロバである。聞き取りは未実施だ。ロウェンは少し間を置いて、台帳に「明朝、第一に」と書き込んだ。怒ってはいない。だが明日の調査は古老の話を聞いてから、という彼の順序は崩れなかった。過去に同じ現象があった年を知れば、次の増水の前に危険が読めるかもしれないからだ。

ダンが膝をさすって言った。「明日か明後日、雨が来る。馬も落ち着きがない」

増水が来れば、金貨はまた淵から吐き出される。割れ目の奥で泡を打つ何かも、動くかもしれない。調査にも、和解の交渉にも、時計が付き始めた。

・　・　・

ここで止める。今夜の机の上はこうだ。

- 材料は揃いつつある：村長の意思、認可状の解釈、標本の1枚、割れ目の通路
- 三分割案は未提示。保管の原則は、竜の正体が分かるまで崩さない —— ロウェンの線は確認済み
- 明日の順序は三つ：**古老の聞き取り（リセ）／三分割案を村長へ提示／雨の前の割れ目対策**

どう進める、二人とも。

M

乗馬から戻って

この村おかしいですね
川がに依存してる割には上流設備が無さすぎる
動物の死体でも落ちてきたら一発なのに、森もボーボー
誰も整備してないの丸わかり

G

（台帳を開き、明日の予定を確認する）

「私は古老への聞き取りを最優先にしたい。雨が来る前に、過去の現象を知っておく必要がある」

「リセ、明朝は頼むぞ。今度こそ紅茶とロバだけで一日を終わらせないでくれ」

（少し笑ってから、真剣な顔に戻る）

「その後、村長オットーに三分割案を提示しよう。ただし、配分比率はあくまで和解の叩き台だ。所有権の確定ではない」

「そして割れ目については、雨が降る前に最低限の安全策を講じたい。増水時に人が近づかないよう、立入制限と見張りを置く。新たな金貨が出ても、村人が淵に殺到する状況だけは避けたい」

（ブリアを見る）

「ブリア、見張りの配置について相談したい。追加報酬が必要なら、先に費用を明確にしよう。今度は後から揉めないようにね」

「金貨は逃げない。だが、人間は金貨を追って危険な場所へ行く。そこを防ぐのが先だ」

K

コーテリ、その観察は監査として正確だ。ロバの上からでも、見るべきものは見ていたわけだ。

答えられる隅だ、帳簿を開こう。エルムが川に依存しながら上流を整備しない理由は、三つ重なっている。

1. **慣習の禁入** —— 淵より上は「竜の山」だ。境界の石はある。だが言い伝えが人を入れないから、手入れをする者もいない
2. **担い手の不在** —— 村は痩せている。若者は町へ出て、共同の普請仕事は村長の病とともに止まった
3. **権威の向き** —— ガルトの仕切りは、金貨の出る下流にしか及ばない。彼の権威は、恵みのある場所にしか向かないのだ

つまり動物の死体一つで村の水が終わるという構造的な危うさが、**誰の帳簿にも載らずに**残っている。世界の帳簿には、確定事項として書き加えた。

そして、この指摘は三分割案に使える。村の共有基金1/4に、使途の第一号として**「川と上流の維持管理」**と書き込めば、村の取り分は「金持ちの分け前」ではなく「村の水を守る金」になる。王都にも、村人にも、説明の立つ金だ。入れるかどうかは、発案者の君が決めていい。

明日の順序は、ロウェンの指定どおりに組んだ。古老の聞き取りを最優先、その後に村長への三分割案の提示、そして雨の前の安全策。

最後の安全策について、ブリアが費用の事前明確化に、明確さで返してきた。

「分かれ道で人を止める配置でいいなら、それは調査の安全確保だ。**今の契約の内側、追加は要らない。**見張りは村の人間を2人、交代で立てろ。日当はあんたの準備費から出る。うちらは監督に回る」

「だが、増水する淵のほとりに人を立たせろと言うなら、話は別だ。あれは危険業務だ。**追加8ソル**、2晩分、危険手当込み。先に言っておく。後から揉めるのは、もう懲りた」

どちらの配置も、彼女なりに筋が通っている。分かれ道なら人は淵に近づけない代わり、淵そのものは無人になる。淵の常駐は、目が届く代わりに金と危険が増える。

・　・　・

ここで止める。今夜の最後の判断は二つ。

1. **見張りの方式** —— 分かれ道（追加なし、準備費から村人の日当）か、淵の常駐（追加8ソル）か
2. **三分割案の村の基金** —— 使途に「川の維持管理」を書き込むか（コーテリの発案）

決まれば、明日は古老の茶から始まる。

M

わかりました！聞き取りですよね！
秘策がありますよ！

G

（ブリアの条件を聞き、納得したように頷く）

「見張りは分かれ道でいい。淵に人を常駐させる必要はない。今の段階で危険手当8ソルを追加するだけの情報は得られていない」

「村人二人を交代で配置し、淵への立ち入りを止める。日当は準備費から支出し、氏名・勤務時間・支払額を台帳に記録する。ブリアたちには監督を頼みたい」

（続いて三分割案の紙を取り出す）

「それから、村の共有基金の使途には『川と上流の維持管理』を明記しよう。これは賛成だ」

「ただし、使途を限定するなら、支出記録と村人への報告も条件にしたい。基金がガルト個人の裁量で使

われるようでは、共有財産を守るという目的に反する」

（紙に追記する）

「村の取り分は単なる利益ではない。水源を守り、村が将来も暮らしていくための資金だ」

「それなら王都にも説明できる。発見者にも村にも、そして王庫にも利益がある」

（リセを見る）

「明朝は古老の聞き取りからだな。君の出番だ。今度はロバではなく、言葉で村の歴史を引き出してくれ」

K

決まったものから帳簿に落とそう。

見張りは**分かれ道方式**。村人2名を交代で立て、氏名・勤務時間・支払額は台帳に記録、日当は準備費から。灰狼団は監督に回る。淵の常駐8ソルは、今の情報では買わない —— ロウェンの査定どおりだ。

三分割案には、ロウェンの追記が入った。村の基金の使途は「川と上流の維持管理」に限定し、**支出の記録と村人への報告を条件とする**。基金がガルト一人の裁量で動く形では、共有財産の名に値しない —— その一文で、この金は「村長の弟の財布」ではなくなった。

・　・　・

翌朝、村の木の下。

古老は二人いる。

ヘルム爺 —— 村の最古老。耳が遠くて手を耳に当てるが、昔の話の年号と順序だけは、孫に確認させるほど正確な老人だ。

ギルダ婆 —— 物忘れは進んでいるが、淵の言い伝えの**歌**だけは一字も違えずに歌えるという。

ロウェンは少し離れた長椅子に足を投げ出し、台帳を開いて控えている。今朝の主役は彼ではない。ダンは見張りの村人を集めに行き、ブリアは分かれ道の地形を見に行った。

そしてリセが、古老二人の前に座った。

コーテリ、君は言ったな。「秘策がありますよ」と。

聞き取り係の秘策を、見せてもらおう。

M

ブリアさんにこのセクシー衣装を着せます

G

（台帳に走らせていたペンが、ぴたりと止まる）

「……リセ。確認させてくれ」

（顔を上げ、彼女の言葉を反芻する）

「古老への聞き取りに、ブリアをその衣装で参加させるのか？」

（眼鏡の位置を直す）

「秘策の方向性が、私の想定していたものと大きく違う気がするんだが……」

（小声で付け加える）

「それに、ブリアは今、分かれ道の確認に行っているぞ」

K

では、秘策の顛末から報告しよう。

ブリアが分かれ道の確認から戻ってきたところへ、リセは衣装を取り出した。酒場の歌姫風、なかなか攻めた一着だ。―― 彼女の荷物には「聞き取り用の衣装一式」が入っているのだという。潜入の聞き取りでは、役になりきるための装備だそうだ。聞き取り係の鞄の中身は、監査官の想定を超えている。

ブリアへの説得 ―― リセ（得意：人をほぐす）◆ [1, 4] → 4、成功

ブリアは衣装を一目見て、きっぱり言った。

「着ない。あたしは今日この後、村の見張りに号令をかける立場だ。その格好で村人に見られたら、命令が笑いものになる」

だが彼女は、計画を殺しはしなかった。

「着るなら聞き取り係、あんただ。あたしは隣で腕を組んで立ってる方が、爺さんたちはよく喋る。……それと、次に着せたきゃ事前に言え。**衣装業務は追加3ソルだ**」

何にでも値段を付ける女だ。だが効果はあった ―― このやり取りを目の前で見ていたヘルム爺が、腹を抱えて笑い出したのだ。ギルダ婆も「まあまあ」と言いながら笑っている。場は完全にほぐれた。秘策は、形を変えて成功したと言っていい。

そして始まった聞き取りが、掘り出し物だった。

ヘルム爺の証言 ―― 祖父の代に金貨が出た年は、「わしが9つの年」。約78年前だ。大雨の後に金貨2枚。その後、上流を見に行った村の若者がいた。3日後に真っ青な顔で戻り、何を見たのか生涯語らず、その冬に死んだ。「山に近づくな」が村の決まりとして固まったのは、その時だという。年号と順序は、彼の言うとおり正確だった。

ギルダ婆の歌 ―― 彼女は淵の歌を歌った。その一節に、こうある。

「主が寝返れば、懐の小銭がこぼれる」

金貨の流出は、眠る主の懐からこぼれる小銭なのだという。オットーの言った「竜が寝返りを打った」と、寸分違わず重なる伝承だ。

だが、歌には続きがあった。ギルダ婆は途中で口ごもり、首を振った。

「もう一節あったんだがね……あたしの母に『その節は歌うな』と止められて、そのまま忘れてしまった。覚えているのは、欠片だけだよ」

欠片は、こうだ。

「主に借りがある者は、川で返す」

借り。主への、借り。竜が金を溜める理由の候補に ―― 習性か、呪いか、契約か ―― 「契約」の文字が、歌の欠片から浮かんできた。

・　・　・

ここで止める。聞き取りは継続中だ。古老二人は上機嫌で、まだ喋る。

・ **ヘルム爺を深掘りする** —— 78年前、上流へ行った若者の話。何を見たと言われているのか、彼の家や墓はどうなったのか
・ **ギルダ婆を深掘りする** —— 欠けた節。「主への借り」とは何か、歌の他の節に手がかりはないか
・ **ロウェンの照合** —— 78年前という年代と、今回の現象・認可状の年代（先々代王）を突き合わせる

どう聞く、リセ。

M

じゃあもういいよ！グレイが着ろよ！

ブリアさん、抑えて！

G

（衣装を手に取るよう促されかけた気配を感じ、静かに台帳で胸元を隠す）

「……私が着るという案は、監査対象から除外してくれ。衣装業務の追加3ソルも認めない」

（咳払いして、聞き取りの内容に意識を戻す）

「だが、これは面白い。特に『主に借りがある者は、川で返す』だ」

「金貨が竜の懐からこぼれるという伝承と、借りを川で返すという伝承。単なる自然現象の説明ではない可能性が出てきた」

（台帳に三つの項目を書く）

「リセ、私は年代を照合する。78年前の出来事と、王の認可状が発行された時期に何か接点がないか確認したい」

「君にはギルダ婆を頼みたい。欠けた節を中心に、歌の続きを知る者がいなかったか、母親がなぜ歌うなと言ったのかを聞いてほしい」

（少し声を落とす）

「ただし、『借り』が金銭的な負債だと決めつけないことだ。命の借り、約束、禁忌……契約の形はいくつもある」

「竜が債権者なのか、債務者なのか。それが分かれば、竜の金蔵の意味も変わる」

K

まず、衣装の件に決着を付けよう。ブリアは笑って、こう言った。

「抑える業務は契約にない。それに監査官を拘束する仕事は、もっと高い。事前申請つきだ」

ロウェンは無事だ。衣装はリセの鞄に戻った。ヘルム爺はまた笑っている。この聞き取りは、もう笑いの分だけ村の側に開かれている。

・　・　・

では、調査の成果を二つ。

一、ロウェンの年代照合が当たった。

認可状の日付は、金貨事件の**2年後**だった。時系列はこう読める。

78年前 —— 金貨2枚、若者の死、「山に近づくな」の成立
76年前 —— 先々代王、エルム村長に「川の落とし物の差配」を認める認可状を発行

偶然の一致かもしれない。だが監査官の目には、これは王室の回答に見えるはずだ。前回、川から金が出たとき、王都は没収に来なかった。代わりに、**落とし物の差配を村に委ねる紙を出した**。つまり三分割・保管方式には、王室自身の前例がある可能性がある。

ロウェンの厳密さのために言い添える。日付の一致は強い示唆だが、因果の確定には王都の文書館にあるはずの記録の照会が要る。それでも、午後の村長への提示に持っていける材料としては、十分に強い。

二、ギルダ婆が、欠けた節の行方を思い出した。

あの節が最後に歌われたのは、78年前の若者 —— 名前は**ヤン**という —— その葬式の席だった。ギルダの母はその場にいて、以後あの節を歌うことを禁じた。理由は、「**川が聞いている**」からだという。

借りの節を川の近くで歌えば、主に聞かれる。契約の条文を、相手の聞く場所で読み上げるな、という戒めにも聞こえる。ヤンの家は絶えたが、彼の話は村長の家系に残った可能性がある —— オットーの祖父の代の話として。

そして、空だ。昼前から北の雲が厚くなっている。雨は明日にも来そうだ。

・　・　・

ここで止める。午後は、予定どおり**村長オットーへの三分割案の提示**だ。材料は昨夜より増えた。

- 三分割案の本文（発見者1/2、村1/4、王庫1/4。保管先行、売却済みは追わない、村の基金は川の維持管理に使途限定＋記録と報告が条件）
- 新材料：**認可状は前回の事件への王室の回答だった可能性** —— 王室の前例は、この方式の味方になる
- 懸念材料：ヤンの話と「主への借り」。オットーは家伝として何か知っているかもしれない

提示の進め方を決めてほしい。口火は交渉役のリセか、それとも数字と前例を持つロウェンが先に紙を置くか。前例のカードは、最初から見せるか、村長が迷ったときの切り札に残すか。

M

仕方ないので空へ向かってぼーっとしてる古老に着せる

G

（台帳を閉じ、三分割案の書面を整える）

「私からは、リセが先に話すことを勧める」

「この交渉は数字だけで決まらない。オットー村長が何を守りたいのか、彼自身の言葉で確認してから条件を提示した方がいい」

（書面の端を指で押さえる）

「王室の前例は、最初から見せよう。ただし、王室が今回も同じ判断をする保証はない。そこは誇張しない」

「76年前の認可状は、王室が川の落とし物を村に差配させたという事実だ。今回の保管方式を認めさせる根拠にはなるが、所有権まで確定するものではない」

（少し考えてから続ける）

「それと、ヤンの話は交渉材料に混ぜない方がいい。あれは村長の家に残るかもしれない、大切な家伝だ。

金貨の分配と引き換えに聞き出すようなことはしたくない」

「まずリセが村長の望みを聞く。次に私が数字と前例を説明する。最後に、署名を急がせず、疑問を一つずつ解消する」

（リセに視線を向ける）

「君が場を開いてくれ。私は帳簿で支える。今回の交渉は、村長に選ばせることが重要だ」

K

では、騒動の決着から。

ヘルム爺は、衣装を着せられたことに気づいていないのか、意に介していないのか —— 普段着の上から歌姫の装いをまとい、空を見上げたまま上機嫌でいる。「若い頃、祭りではな……」と、遠い話を始める始末だ。ギルダ婆は肩を震わせ、通りがかりの村人たちも笑っている。騒動は、醜聞ではなく村の笑い話として着地した。

通りかかったブリアの一言だけ、記録しておく。「爺さんのは無料なのか、衣装業務は」

ロウェンの台帳には、この件は一行も書かれていない。賢明だ。

・　・　・

午後。交渉の段取りは、ロウェンの設計どおりに組んだ。

1. 口火はリセ —— 村長が何を守りたいのか、彼自身の言葉で聞く
2. 前例は最初から見せる。ただし誇張しない —— 認可状は保管方式の根拠にはなっても、所有権を確定するものではないし、王室が今回も同じ判断をする保証はない
3. ヤンの話は、交渉の材料に混ぜない。家伝は分配の引き換えに聞き出すものではない
4. 次にロウェンが、数字と前例を説明する
5. 署名は急がない。疑問は一つずつ。村長に選ばせる

ついでに報告だ。見張りの村人はダンが手配を済ませた。鍛冶屋の弟子コルと、網元の息子サビ。今夕から分かれ道に交代で立つ。日当は各0.75ソル、雨の2日間で3ソルの見込みだ。

・　・　・

村長の家。

妻が静かに二人を病室へ入れた。オットーは今日は少し起こしてもらっていて、枕元には認可状の箱がある。窓の外では、雲が低くなってきた。

「ギルドのお二人さん。今度は見舞いだけじゃない顔だな」

老村長は弱い体で、目だけは正確に二人を見ている。

コーテリ、場は君のものだ。村長が何を守りたいのか —— 彼の言葉で聞き出すところから始めてくれ。

M

一つ聞いていいですか？

78年もドラゴンの姿も、声も聞いたことないんですよね

あまりにも不自然だと思うんですけどそれ

G

（リセの疑問に、台帳を開く手を止める）

「……私も、そこは不自然だと思う」

「78年前に金貨が流れた。上流へ向かったヤンは何かを見て、戻ってから口を閉ざし、その冬に亡くなった。それ以来、村人は山に近づかなくなった」

（指を折りながら整理する）

「だが、考えてみてほしい。78年間、竜の姿を見た者も、声を聞いた者もいない。今回も我々が確認したのは、温水、気泡、岩壁の擦過痕、そして岩の向こうにある金属の塊だ。竜そのものではない」

「可能性はいくつかある」

1. **竜は実在するが、眠り続けている。** 目撃されないこと自体は説明できる。
2. **竜は別の形で存在している。** 村人が竜と認識できないものかもしれない。
3. **竜は既にいない。** 伝承だけが残り、金貨の流出は別の現象かもしれない。
4. **竜という存在は、契約や信仰の象徴にすぎない。** 「主への借り」という歌が、その可能性を示している。

（オットーに視線を向ける）

「村長。ひとつ伺いたい」

「この村では、竜は実際に姿を現す生き物として語られているのでしょうか。それとも、姿を見せない何かを、竜と呼んでいるのでしょうか？」

「78年間、誰も見ていないという事実を、村の人々はどう受け止めているのですか？」

（声を少し落とす）

「我々は竜の金庫を探している。しかし、そもそも金庫の主が何者なのか、まだ分かっていないんです」

K

オットーはしばらく天井を見て、それから正確に答えた。

「娘さんの言う『竜』はな、王都の言葉だ。文書も、ギルドの分類も、両替商の噂も、みんな竜と言う。翼の生えた獣の絵まで付いておる」

「だが村のもんは、普段そう呼ばん。**主**と呼ぶ」

「主は、姿を拝むものじゃない。天気みたいなものだ。……若い監査官さん、あんたは川の源を見たことがあるかね。ないだろう。だが水は、毎日来る。78年、誰も姿を見ていないのは、村では不自然なことじゃないんだ」

ロウェンの四つの仮説に、彼はどれとも言わなかった。ただ、その目が少し変わったのは ―― ヤンの話に触れたときだ。

「あんたたちは、ヤンの話を、金と引き換えに聞き出そうとしなかった。……だから、これはわしから話す」

ヤンは、オットーの祖父の弟だった。戻ってから何も語らなかった彼が、死に際に一度だけ、兄に言った言葉が家に残っている。

「主は、竜じゃなかった」

何だったのかは、言わなかった。いや、言えなかったのかもしれない。オットーはそれ以上を付け加えなかったし、二人も引き出そうとはしなかった。

そして最後に、ロウェンの「借り」の問いへ、彼はこう返した。

「主に借りを作ったら、川で返す。……返すというのはな、上流の普請のことだった。倒木を除け、水路を浚え、山から取りすぎたら植え直す。それが、この村の返済だった」

「その普請が止んで、もう何年になるか。わしが倒れてからは、弟もやらん。あいつの仕切りは、金の出る下流だけだからな」

コーテリ、聞いたか。君のロバの上からの監査 —— 「川に依存する割に、上流は誰も整備していない」 —— が、伝承の側から裏付けられた。整備とは、この村では礼儀であり、返済だったのだ。三分割案の「村の基金は川の維持管理に」という一文は、村の言葉ではこう読める。**借りの返済を、再開する金。**

妻がそばで、そろそろ休ませてほしいという顔をしている。オットーの体力は長くは持たない。

・　・　・

ここで止める。机の上の状態はこうだ。

- 村の主は「竜」とは限らない。仮説①〜④は未決のまま、ヤンの最期の言葉だけが残った
- 三分割案の提示は、まだこれから。今の流れなら、村長の守りたいものは彼の口からかなり出た —— 村が割れないこと、取りすぎないこと、返済の作法を取り戻すこと
- 残り時間は長くない。リセの口火で案を置くか、先に一つだけ確認したいことがあるか

どう進める、二人とも。

M

仮説はいくつかあるけどまだ邪推にしかならないし調査で決定打が出るまで結論でませんし〜

G

（オットーの言葉を聞き、しばらく黙って台帳に書き留める）

「……なるほど。ようやく、帳簿に載せるべきものが見えてきました」

（リセに目を向ける）

「君の観察が、ここにつながったな。上流の整備は単なる公共事業ではなかった。村にとっては、主への返済であり、土地との約束だった」

（オットーに向き直る）

「村長、一つだけ確認させてください」

「その普請を再開することは、村人たちにとって、今でも主への返済になるのでしょうか。それとも、かつての作法を失った今では、もう意味がないと考える者もいるのでしょうか？」

「私は、基金の使途を川と上流の維持管理に限定する案を持ってきました。しかし、それが単なる予算措置なのか、村の約束を取り戻すことなのかで、意味が変わります」

（少し間を置く）

「それを確認できたら、三分割案を提示しましょう。村の取り分を増やすためではなく、村が返済を再開できるようにするための仕組みとして」

「ただし、主の正体も、金貨の所有権も、まだ決めつけません。分からないものを分かったことにするのは、監査ではありませんから」

K

コーテリ、その慎重さは正しい。仮説は四つとも、まだ邪推の域を出ない。ロウェンも同じ線だ ―― 分からないものを分かったことにするのは監査ではない。台帳には事実だけが載っている。

オットーが、ロウェンの確認に答えた。

「普請の意味か。……世代で割れておる」

- **古老の世代** ―― ヘルムやギルダには、返済の作法はまだ生きている
- **ガルトの世代** ―― 普請は「無償の奉仕」に見える。無理に復活させれば、反発して潰れる
- **若い世代** ―― ミロたちは意味を知らない。だが、日当が出て、目的の見える仕事なら付いてくる

「意味はな、やり方で戻る。賃金が出て、記録が残って、村人に報告される形で再開すれば、作法は戻ってくる。無償の義務として押し付ければ、弟の世代が潰す」

そして、老村長はこう言った。

「川から出た金で、川を返す。それなら、村のもんも頷く」

ロウェン、君の確認は取れた。基金の使途限定は、単なる予算措置ではない。形を整えれば、村の約束を取り戻す仕組みになる ―― 村長自身の言葉で、その保証が出た。

オットーは枕にもたれて言った。「案を聞かせてくれ。雨が来る。わしの体も、待ってはくれん。今日のうちに聞いておきたい」

・　・　・

ここで止める。机は整った。

- 提示の枠組みは決まっている：村の取り分を増やす案ではなく、**村が返済を再開できるようにする仕組み**として出す
- 口火はリセ、続いてロウェンが数字と認可状の前例を置く。署名は急がない
- 村長の懸念は事前に分かっている：村が割れないこと、ミロのような発見者が奪われないこと、王都が直轄に来ないこと

コーテリ、口火は君だ。村長に、案の心を話してくれ。

M

いえ、ここで利益分割案を出すのは得策じゃあありません

もし万が一ほんとに龍、それに類する現象が起きているのだとしたら私たちの手に負えなくなる

その場合どうやっても王都へ連絡して収拾を付けてもらわなきゃいけなくなる

その時「横領二人組」として新聞に名前をあげられたくないでしょう？

G

（リセの言葉に、静かに頷く）

「……その懸念は、私も支持する」

（オットーに向き直る）

「村長、三分割案は一度保留にしましょう。今ここで金貨の分配を決めることは、村にとっても我々にとっても危険です」

「現時点で、金貨が何に由来するのか、主が何者なのか、所有権が誰にあるのか、何一つ確定していません」

「仮に竜、あるいはそれに類する存在が実在し、今回の現象がその活動によるものなら、我々の判断だけで財宝を分配することはできない。王都への報告と介入が必要になるでしょう」

（台帳を閉じる）

「その際、我々が勝手に利益配分を決めていたとなれば、村長もギルドも説明責任を負うことになる。横領や不正な利益供与を疑われる余地は残したくありません」

「ですから、今決めたいのは分配ではなく、調査中の保全措置です」

- 新たに発見された金貨は記録し、村長の管理下で一時保管する。
- 発見者の氏名と発見場所を記録し、発見者の権利を保全する。
- 既に売却された金貨については、現時点で回収を求めない。
- 上流の立ち入り制限と水源の安全確保を優先する。
- 調査結果をまとめ、必要なら王都に正式報告する。

「村長。これは村から利益を取り上げる提案ではありません。正体の分からないものを、正体が分かるまで誰にも勝手に処分させないための提案です」

（リセに目を向ける）

「分配の話は、その後でいい。まずは全員が無事にその日を迎えられるようにしましょう」

K

リセ、その判断は今日一番の仕事だ。

分配案は紙の上では美しかった。だが正体の分からない金庫の中身に、判を押した分配表を先に作るということは、主が実在した瞬間に、署名者全員が説明責任の側に回るということだ。「横領二人組」の新聞見出しは、笑い事ではない —— 王都には印刷新聞があって、ギルドの不祥事は本当に記事になる。君は交渉の席で、交渉そのものを降りる判断をした。それができるのは、目先の合意より後の帳簿を見る者だけだ。

ロウェンの保全措置への切り替えも、速かった。その場で二人を確認しよう。

オットーは、五つの措置を聞き終えて、静かに言った。

「……それはな、認可状の『差配』そのものだ。預かって、困らんように分ける —— いや、今は分けない。預かって、守る。新しい権限はいらん。わしの判で足りる」

保全措置、原則合意。 覚書はロウェンが今夜起草し、オットーは明日の朝、判を押す。

ただし老村長は、摩擦のありかも正確に見ている。

「弟は騒ぐだろう。『村の金が凍らされる』とな。……村人もだ。行商人に売れば、今すぐ現金が入った。その機会を止める紙だということは、隠せん」

登録した者だけが、発見者としての権利を紙で守られる。売ってしまえば、その紙は残らない。強制ではなく、その形で村に示すしかない —— ここは明日の告知の腕の見せどころになる。弟へは、オットー自

身が言うそうだ。

・　・　・

村長の家を出ると、雨が始まっていた。

細い、冷たい、止みそうにない雨だ。分かれ道では今夜からコルとサビが見張りに立つ。川は明日までに水位を上げるだろう。淵の奥で泡を打つものが、増水にどう応えるかは、まだ誰も知らない。

ここで止める。今夜と明日の机はこうだ。

- **今夜** —— ロウェンが保全覚書を起草。リセは明日の村への告知の段取りを考える番だ
- **明朝** —— オットーの押印。村への告知（ガルトの反応は必至）
- **その先** —— 増水する川。淵が何かを吐き出すか、それとも何かが動くか

M

私って天才

村の確執をよくわからない空気で押し流して、その問題を一体棚上げしながら情報を引き出して

しかもカードでも勝ってる

やば、感動してきた、寝よ

G

（リセの宣言を聞き、台帳を閉じる）

「……確かに、今日の君は相当な成果を上げたな」

「カードで勝ち、古老から78年前の証言を引き出し、村の対立を激化させず、さらに利益分割という危険な議題を棚上げした」

（少し笑う）

「監査官としては、最後の判断が特に気に入ったよ。合意を取ることより、合意してはいけない状況を見極めることの方が難しい」

「ただし、一つ訂正しておこう」

（台帳を指で叩く）

「君はまだ寝ていい。私は覚書を書かなければならない」

「……明日の朝、起きられなかったら、今度は君の名前を覚書の余白に書いておくぞ」

（羽根ペンを取り直す）

「おやすみ。聞き取り係殿」

K

天才の申告を、監査しておこう。

帳簿で確認できた分 —— カードの勝ち分+1.6ソル。古老からの78年前の証言と、歌と、欠けた節の引き出し。村の確執を荒らさずに、村長の家伝まで開かせた聞き取り。そして分配という地雷を、踏む前に棚へ上げた判断。……うん、今日のリセの貸方は、かなり厚い。

借方も一応、書いておく。二度寝で午前の測量を欠席したこと。ロバ。衣装業務の未遂が三件。

それでも差し引きは、大幅な黒字だ。ロウェンの言うとおり、合意を取るより「合意してはいけない場面」を見極める方が難しい。今日の君は、それをやってのけた。

さあ、寝なさい、聞き取り係殿。ロウェンは覚書を書く。雨の音と、羽根ペンの音と、分かれ道の見張りの無事が、今夜の村の全部だ。

・　・　・

ここで本日は店じまい。 次回は作中4日目、雨の朝から ―― オットーの押印、村への告知とガルトの出方、そして増水した川が淵で何を見せるか。

おやすみ、コーテリ。グレイにも、よろしく。
